松山市文化財調査報告書Ⅴ

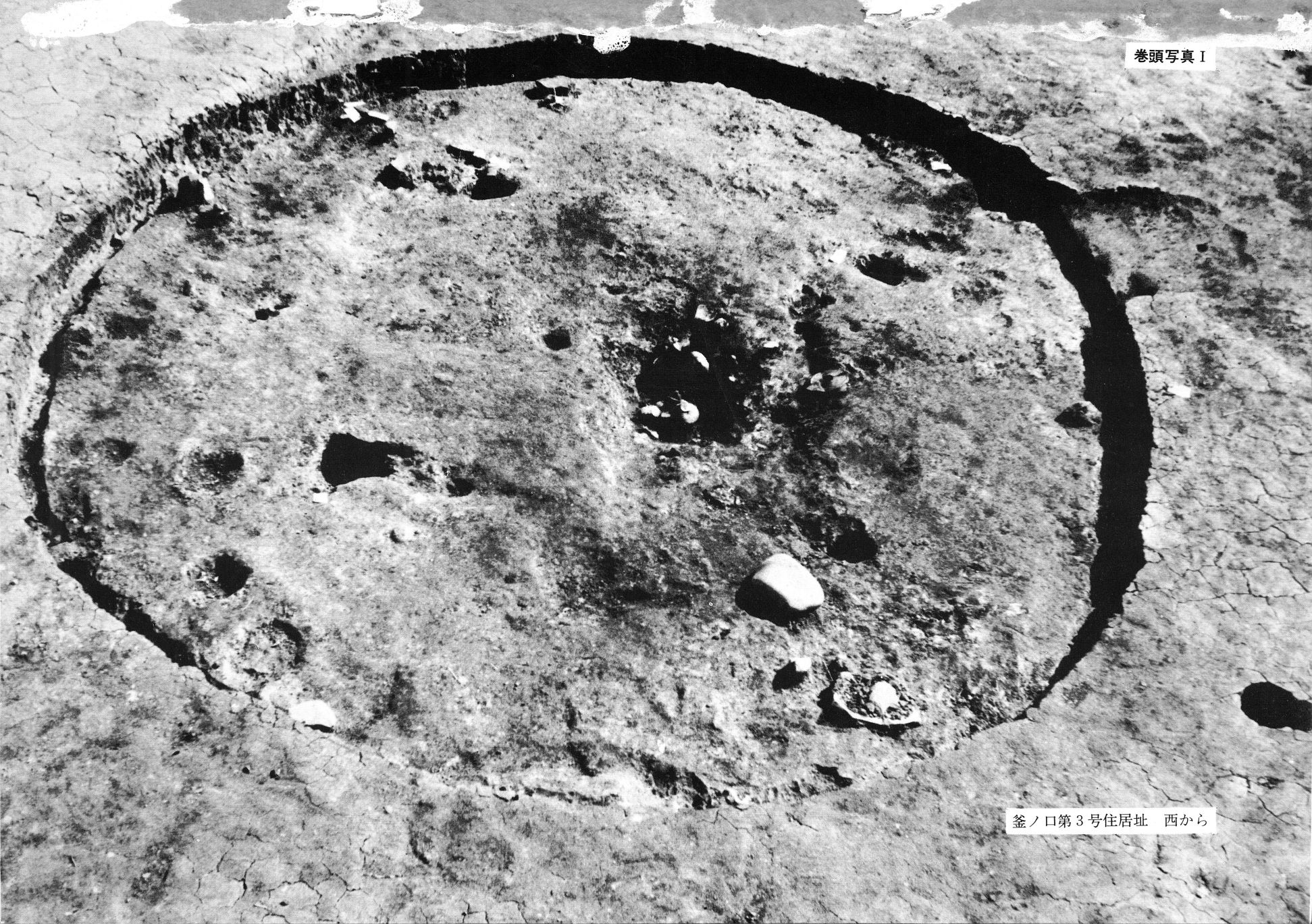
釜ノ口遺跡調査報告書

1973

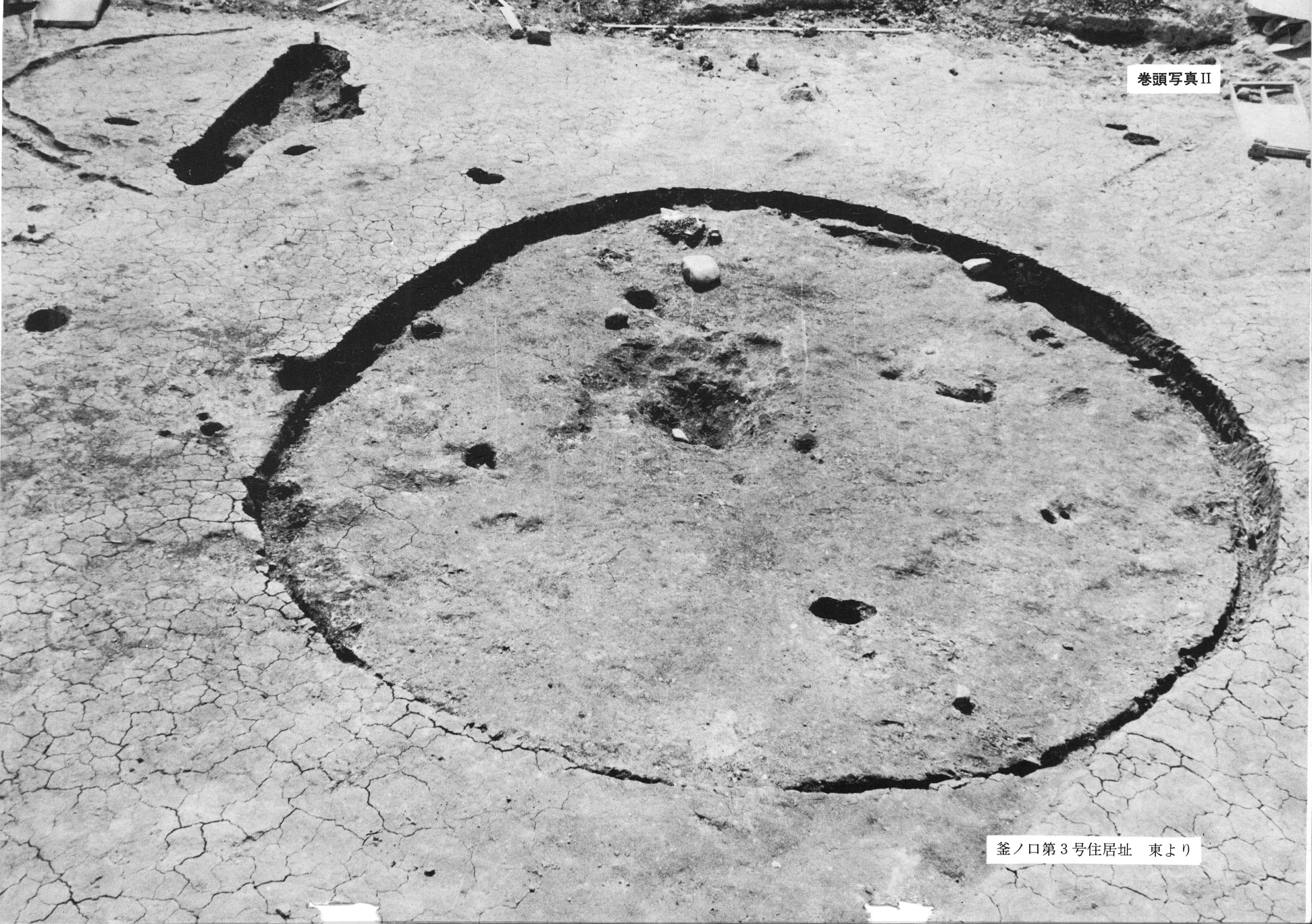
釜ノ口遺跡発掘調査団

松山市教育委員会

巻頭写真Ⅰ



釜ノ口第３号住居址　西から


巻頭写真II
釜ノ口第3号住居址　東より

序　　文

伊与ノ郡，郡家より東北に以(むか)ひ，天山在り天山と名づくる由は，倭に天ノ加見山在り，天より天降したまふ時に，二つに分きて，片端をば倭の国に天降し，片端をば北の土(くに)に天降しき。因りて天山といふはこのことの本なり。その印影を敬礼(いやまい)ひて，久米寺につかへまつりき。これは伊予風土記逸文の中の天山の記述であります。現在も天山，東山，星ノ岡一帯には遺跡が無数に存在しております。天山からは昭和46年12月，半円方形帯神獣鏡や台付壺形土器などが出土して注目されていたところであります。

釜ノ口遺跡はその天山より北約700ｍのところにあり松山南道路国道33号バイパス建設工事中に発見され，直ちに発掘調査を行ったところであります。ちょうど古照遺跡発見直後であり，埋蔵文化財関係者はてんやわんやの最中でありましたが100余日をかけて十分な調査を行うことができましたのは建設省をはじめ関係者のご支援によるものと感謝しております。

調査は道路敷地内で行われただけでありますが，隣接地からも偶然に木器・土器などが発見されておりますので順次調査することにより松山のあけぼのの歴史が究明できることと期待されております。

終りにあたって発掘調査にあたられたかたがたをはじめ多くの協力者のご尽力に対し厚くお礼申しあげます。

松山市教育長

関　谷　勝　良

目　　次

I　調査にいたるまでの経過 ――――（岸　郁男）…… 1

II　遺跡の位置と環境 ――――（長井数秋）…… 3

(1)　遺跡の位置 ――――（　〃　）…… 3

(2)　遺跡の自然的環境 ――――（　〃　）…… 3

(3)　遺跡の文化的環境 ――――（　〃　）…… 4

III　調査の経過 ――――（大山正風）…… 5

IV　釜ノ口遺跡の層序と微地形 ――――（　〃　）…… 6

V　釜ノ口遺跡の遺構・遺物 ――――（　〃　）…… 7

(1)　住居址 ――――（　〃　）…… 7

(2)　建造物址 ――――（　〃　）……15

(3)　溝状遺構 ――――（　〃　）……17

(4)　土　坑 ――――（　〃　）……19

(5)　特殊遺構 ――――（　〃　）……20

VI　総　　括 ――――（大山正風・長井数秋）……21

(1)　遺跡の時期 ――――（　〃　）……21

(2)　遺　構 ――――（　〃　）……22

(3)　遺　物 ――――（　〃　）……24

釜ノ口遺跡図面類目次

Map　釜ノ口遺跡付近の地形図

Fig 1　釜ノ口遺跡全体測量図・断面図 ――――（大山）……27

〃 2　1号住居址平・断面測量図 ――――（〃）……29

〃 3　2号住居址平・断面測量図 ――――（大山・森）……30

〃 4　3号住居址平・断面測量図 ――――（大山・長井・森）……31

〃 5　2号建造物址平・断面測量図 ――――（大山）……32

〃 6　3号建造物址平・断面測量図 ――――（〃）……32

〃 7　4号建造物址平・断面測量図 ――――（〃）……33

〃 8　5号建造物址平・断面測量図 ――――（〃）……33

〃 9　6号建造物址平・断面測量図 ――――（〃）……34

〃10　B土坑平・断面測量図 ――――（〃）……34

〃11　G土坑平・断面測量図 ――――（〃）……35

〃12　1号住居址出土遺物実測図 ――――（大山・長井）……35

〃13　2号住居址出土遺物実測図 ――――（長井・大山）……36

〃14　3号住居址出土遺物実測図 ――――（大山・長井）……37

〃15　溝状遺構出土遺物実測図 ――――（大山）……38

釜ノ口遺跡図版類目次

PL 1　補足調査前の1号住居址（北西より）……39

〃 2　1号住居址（西より）……39

〃 3　1号住居址遺物出土状況……40

〃 4　2号住居址遺物出土状況（南より）……40

〃 5　2号住居址遺物出土状況（壺形土器）……41

〃 6　2号住居址遺物出土状況（鉢形土器）……41

〃 7　2号住居址遺物出土状況（円筒形土器）……41

〃 8　2号住居址遺物出土状況（石包丁）……41

〃 9　補足調査前の2号住居址（東より）……42

PL 10　２号住居址Ｐ－２の礎板　（東より）……42
〃 11　発見時の３号住居址　（南より）……43
〃 12　３号住居址　（北東より）……43
〃 13　３号住居址炉址付近　（東より）……44
〃 14　３号住居址入口部　（南より）……44
〃 15　３号住居址遺物出土状況　（砥石）……44
〃 16　３号住居址遺物出土状況　（高坏）……45
〃 17　３号住居址遺物出土状況　（朝顔口縁）……45
〃 18　３号住居址炉址内部　（朝顔口縁）……45
〃 19　３号住居址Ｐ４柱残存部断面　（南より）……46
〃 20　３号住居址Ｐ１柱残存部断面　（北より）……46
〃 21　３号住居址Ｐ１主柱基部　……47
〃 22　建造物址（手前より，４・３・２号）　（西より）……47
〃 23　建造物址（手前より３・２号）　（西より）……48
〃 24　Ａ溝中出土土器―Ａ溝北端―　（北より）……48
〃 25　北部溝状遺構　（東南より）……49
〃 26　Ａ溝内遺物出土状況　（壺形土器）……49
〃 27　Ａ溝内遺物出土状況　（壺形土器）……49
〃 28　Ａ溝内遺物出土状況　（壺形土器）……50
〃 29　Ａ溝内遺物出土状況　（壺形土器）……50
〃 30　Ａ溝内遺物出土状況　（壺形土器）……50
〃 31　土坑Ｃ中の粘土塊　……50
〃 32　土坑Ｇ　（西より）……51
〃 33　釜ノ口遺跡全景　（南より）……51

○　釜ノ口遺跡発掘調査団

発掘調査責任者	関谷勝良（松山市教育委員会教育長）
調査団長	長井数秋（愛媛県立松山南高等学校教諭）
調査主任	大山正風（温泉郡川内町立川内中学校教諭）
調査員	森　光晴（松山市立久米中学校教諭）
〃	平松康毅（第１次調査区担当）
調査補助員	池田　学・田中勝海・神谷安夫・曽我部伊左ヱ門・岡田敏彦・本山道男 仙波五月
調査事務局	谷川敏一（松山市社会教育課長） 野間清典（松山市社会教育課課長補佐） 岸　郁男（　〃〃　文化係長） 矢野　完（　〃〃　主事） 西尾幸則（　〃〃　主事）
一般協力者及団体 （敬称略順不同）	家弓哲一・戸田　智・森　正史・秦　清昭・吉本　拡・河野藤吉・松本新一 杉木一正・愛大附属農業高校・松山南高校・松山北高校・松山商業高校 松山工業高校・済美高校・雄新中学校・拓南中学校・陸上自衛隊松山駐屯部隊

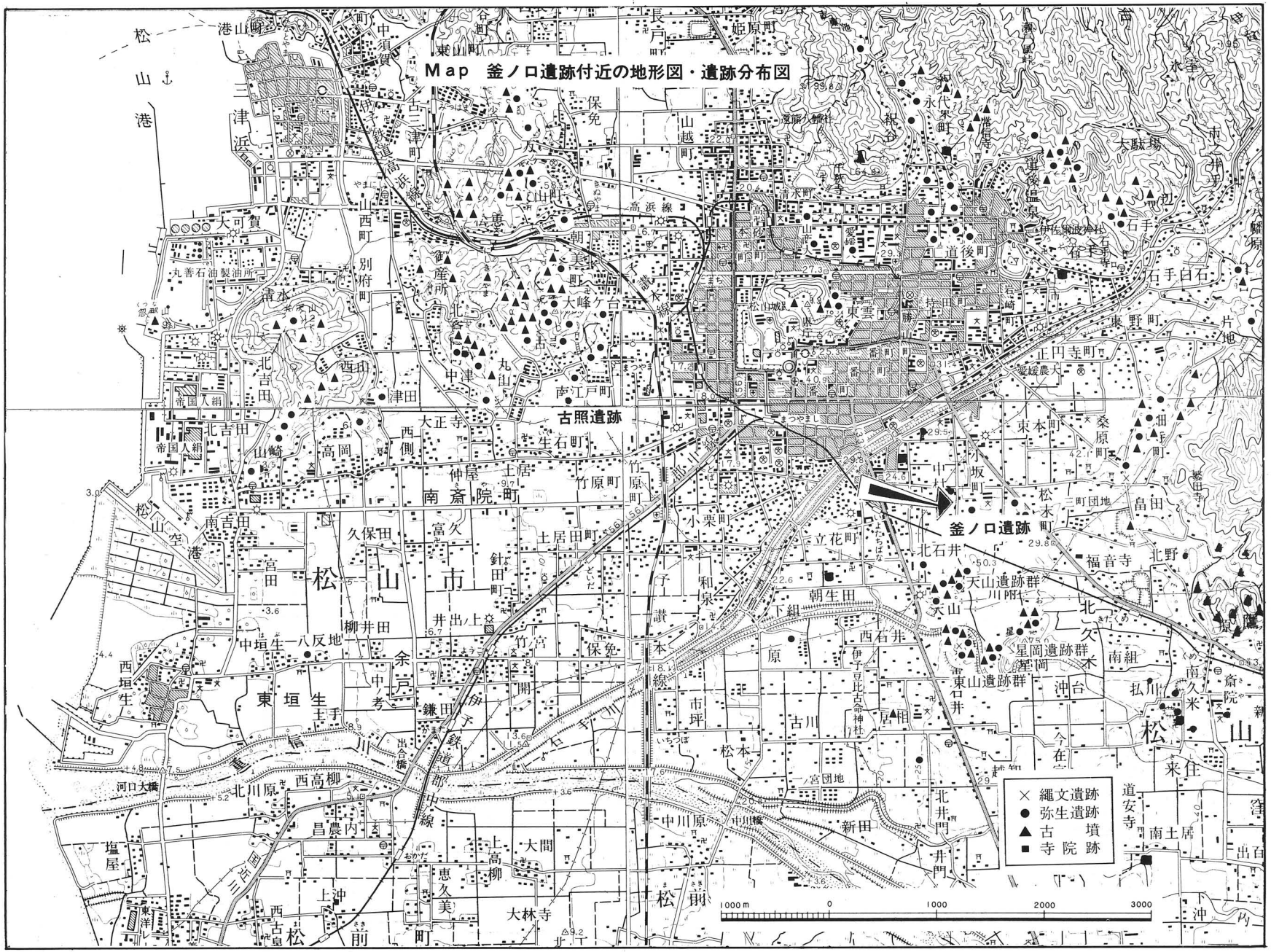
Ⅰ　発掘調査にいたる経過

国道33号・松山南バイパスは，松山市勝山町で現国道11号線から分岐し，中村町を経由して小坂町で松山環状線，国道11号線・松山東バイパスと接続されるものである。この松山南バイパス建設工事は1.1kmの区間である。昭和47年度事業として工事中に１個の土器が発見されたとの情報を得た松山市教育委員会が調査の結果この遺跡の存在を発見した。

釜ノ口遺跡が発見された頃は，ちょうど古照遺跡が南江戸町の松山市下水道中央処理場から発見され，「松山で弥生時代の埋没住居発見」という連日の報道が，全国津々浦々まで伝わり，明日香の高松塚，中国の長沙の漢代の墓につづいて考古学ブームを呼び起していた。松山市教育委員会では古照遺跡の他の遺構の存在の有無を調査するため下水道中央処理場の全敷地7.7ヘクタールに渉って1.755本の地下６～20ｍに及ぶボーリング調査の実施を数日後にひかえた多忙をきわめていたところであった。

釜ノ口遺跡の南には，先に直径19cmの五神五獣五色鏡が出土した天山遺跡もあり，かねてから注目していたところであった。釜ノ口附近の工事の進行状況は道路側壁が完成した直後であったが，道路敷の表土の取除けは行われてなく，遺構はそのまま残っていた。直ちに建設省松山工事事務所と折しょうし，委託事業として発掘調査を実施した。

本書は，昭和47年12月19日から昭和48年３月31日まで松山市教育委員会・松山市釜ノ口遺跡発掘調査団が実施した釜ノ口遺跡の発掘調査報告書であり，調査費用は建設省が負担したものである。


Map 釜ノ口遺跡付近の地形図・遺跡分布図
古照遺跡
釜ノ口遺跡
天山遺跡群
星岡遺跡群
松山市
南斎院町
東垣生
西垣生
北久米
松山
松前町
道後温泉
高浜線
伊予鉄道
JR予讃本線
松山空港
港山町
三津浜
大可賀
北吉田
南吉田
宮田
久保田
富久
土居田町
針田町
柳井田
中垣生
一八反地
井出上
竹宮
保免
余戸
鎌田
開
考
上手
出合橋
河口大橋
北川原
西高柳
昌農内
塩屋
上沖
西古泉
大林寺
恵久美
上高柳
大間
中川原
中川橋
新田
井門
北井門
南土居
道安寺
来住
今在
沖台
居相
古川
市坪
松本
宮団地
和泉
朝生田
下組
西石井
東石井
北石井
立花町
小栗町
竹原町
土居
生石町
大正寺
西側
高岡
山崎
伸屋
南斎院
別府町
西田
津田
中津
丸山
南江戸町
大峰ケ台
北斎院
東雲
拝田町
正円寺町
東野町
石手
石手寺
石手白石
道後町
宝厳寺
伊佐爾波神社
大駄場
水泉
東本町
桑原町
畑寺
畠田
福音寺
北野
南組
南久米
斎院
払川
小坂町
中村
三町団地
松木町
新
×縄文遺跡
●弥生遺跡
▲古墳
■寺院跡
1000m
0
1000
2000
3000

II　遺跡の位置と環境

(1)　遺跡の位置

釜ノ口遺跡の絶対位置は，北緯33°49′19″，東経132°46′49″の交差する付近一帯であり，行政的位置は，松山市小坂町４丁目34番地を中心とする地域で，通称釜ノ口と呼ばれているところである。

遺跡の垂直的位置は，海抜27ｍで伊予灘までの直線最短距離は約７㎞を有する。本遺跡は松山市の中心部から南に向って石手川を渡り，市街地が尽きる国道33号線の東方約400ｍの水田中に立地していたが，現在は国道33号線バイパス敷地内になっている。

(2)　遺跡の自然的環境

高縄半島に水源を発する石手川は，花崗岩，和泉砂岩による山地を鋭く下刻しながら，湯山渓谷を形成し，石手町，東野町付近で松山平野に出て下流で重信川に合流して，西瀬戸内海の伊予灘に流入している。

石手川は石手町，東野町付近の傾斜変換線下左岸に比較的緩傾斜の古期扇状地を形成しており，その扇端は石手川の支流である川附川まで延びている。扇側は東野町の南方のお茶屋台から南に延びる洪積台地に接している。

石手川の南部1.5㎞隔てた付近を西に流れる小野川と，天山付近でこれに合流する川附川は，古期扇状地と，これに続く洪積台地を浅く開析している。釜ノ口遺跡は，この石手川の形成した古期扇状地の扇端部に近い場所に位置しているため，遺跡に続く南部は幼年期的な開析谷となり，この開析谷に洪積台地上に堆積していた有機質を含有した降下性火山灰が流入堆積され，肥沃な低湿地となっている。

本遺跡に東接するところにも極く小規模な埋没寸前の小開析谷を認めることができる。遺跡の立地する場所はこれらの低湿地に$\frac{7}{1000}$～$\frac{8}{1000}$の傾斜で舌状に突出する微高地上である。弥生時代においては，遺跡の南部に広がる肥沃な低湿地が稲作農耕に欠かすことのできぬ水田であったものと思われる。

本遺跡の南方500ｍ～1000ｍの川附川と小野川の合流地域には，北から土亀山（50ｍ），天山（51ｍ），東山（53ｍ），星岡山（75ｍ）と和泉砂岩よりなる分離独立丘陵が点在し，さらに北西には石手川を隔てて松山城の聳える分離独立丘陵である勝山が存在する。天山連山の南方には四国山脈が東西に走行し，東方遙かに「伊予の高嶺」と呼ばれる石鎚山が聳えている。

翻って西方には瀬戸内海を望むことのできる眺望のすぐれた場所である。

遺跡付近の地質は，和泉砂岩の分解した土砂を基盤とするものの，一部花崗岩の分解した土砂が混入堆積している。これは石手川の侵蝕，運搬作用によったものと考えられる。

なお，遺跡全面ではないが，土坑状のピット中や部分的な場所に赤色オンジと呼ばれる降下性火山灰の堆積が認められた。この赤色オンジは松山平野南部に続く洪積台地上にも比較的厚く堆積しているのを確認済みである。

(3) 遺跡の文化的環境

石手川が松山平野に流出する石手町，東野町から石手川左岸，さらに川附川，小野川の流域一帯にかけては，最近夥しい弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が発見され，次々と調査がおこなわれている。本遺跡の立地する古期扇状地の北東に続く洪積台地上には，弥生前期・中期・後期のお茶屋台遺跡群があり，その先端部には経石山，三島神社古墳等の松山平野における巨大古墳である前方後円墳が分布している。

釜ノ口遺跡の北方の石手川左岸の堤防下付近には弥生中・後期の中村遺跡があり，これより釜ノ口に至る約１㎞の地域には連続して弥生時代の遺跡が分布している。さらに釜ノ口から東方国道11号線バイパスコース沿いの久米町高畑遺跡に至る延長約３㎞の間には，ほとんど間隙を置かない状態で弥生後期から古墳時代前期にかけての遺跡が存在している。翻って西方１㎞の地点には弥生後期の石井北遺跡があり，天山連山の周辺の平野中にも弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が無数に存在する。

本遺跡の南方に連なる土亀山には弥生の，天山には弥生と多数の古墳のある天山遺跡群が，東山には縄文後期から弥生，古墳時代にかけての東山遺跡群があり，星ノ岡山にも同様な星岡山遺跡群が存在する。このように天山連山は愛媛県における先史遺跡の宝庫の一つになっている。この宝庫の周辺に位置を占める釜ノ口を中心とした中村遺跡，石井北遺跡，東山遺跡群，高畑遺跡を結ぶ三角状の地域内一帯の遺跡群は，天山連山の各遺跡群と密接な関係が存在していたと考えられる。

特にこの地域一帯における弥生時代から古墳時代にかけての遺跡名は，現在の行政的呼称によって区分して呼んでいるのであり，弥生，古墳時代においては広大な面積を有する一つの遺跡であったかも知れない。このような環境下に立地する釜ノ口遺跡を単独に取りあげて言々することはいさゝか問題があり，現在進行している関連性を有する遺跡の調査がすべて完了した段階で総合的かつ体系的に考察し，この地域の人文的な変遷をも明らかにする必要があろう。

III　調査の経過

本遺跡の調査は，昭和47年12月19日より昭和48年３月31日までの期間であり，雨天を除き日，祭日もほとんど休まずの作業であった。

昭和47年12月19日，調査を開始，遺跡の北端より南へ40ｍまでの約800㎡を第１次調査（Ａ区）とし，これを平松康毅を中心に，長井数秋，森光晴，大山正風が担当した。

発掘は北部の各遺構から南へ徐々に遺構を追いながら拡張する形態がとられ，住居址１ケ所，建造物址１ケ所，土坑５ケ所，溝６ケ所を検出した。これらの遺構からは，須恵器片，土師器片，弥生時代後期終末期に属する壺，甕，高坏，円筒土器，石包丁，鉄鏃及び縄文期の石槍を検出した。

昭和48年２月23日，Ａ区より南へ拡張し，調査予定区域南限までの33ｍ，約660㎡を第２次調査とし，これを大山正風を中心に，長井数秋，森光晴が担当した。第２次調査においては，グリット方式による全面発掘形態をとり，調査区域より住居址１ケ所，建造物址４ケ所，土坑２ケ所，溝１ケ所，柱穴20ケ所を検出した。これらの遺構からは，弥生時代後期前半に属する壺形土器片をはじめ，石鏃，ガラス小玉等を検出した。

昭和48年３月24日，第１次調査区域内の各遺構に関して，調査不足部分が認められたので補足調査を開始し，これには第２次調査担当者があたった。なお，遺跡の全体測量を開始し，これは大山が担当した。

補足調査によって，住居址１ケ所，建造物址１ケ所，柱穴６ケ所を検出し，また，第１次調査において検出された各遺構の部分的修正がされた。これらの遺構からは，弥生時代後期に属する壺形土器片や，ガラス小玉等を検出した。

本遺跡の調査終了は，第３号住居址柱穴内に残存する柱材を検出することによって，表面的調査を全て完了した。

本遺跡，各遺構の測量は，大山正風，森光晴が担当し，出土せる遺物の実測は長井数秋，大山正風が担当し，遺跡の遺構，遺物の写真は西尾幸則が担当し撮影した。

本報告書の執筆は，大山正風，長井数秋の分担執筆である。なお，第１次調査区域内に関する見解，資料提出が，担当者より報告書執筆期限までになく，今日にいたっている。したがって同区域内に関する見解は，補足調査における第２次調査者によるものであり，資料不足であることを了承いただきたい。

Ⅳ　釜ノ口遺跡の層序と微地形

釜ノ口遺跡の視覚的観察における層相は，遺跡東部における南端から北端にかけてのトレンチ調査によって，Tab 1に示されている如く，上層から第1層～第5層である。遺跡の第1層に関しては共通であるが，北部と南部では，第2，第3層について堆積層に若干の差異を生じている。（Fig 1 ＊印で図示）

北端においては，第3層は花崗岩，及び和泉砂岩の小さな礫を多く含んでおり，第4層にいたっては，全くの砂礫の堆積層であり，近くに河川の存在，あるいは，砂礫の堆積する微窪地の存在が考えられる。

南端では第5層は，青灰色の粘土層であり，安定した堆積層である。最深部で花崗岩と和泉砂岩の礫を検出しているが，地山の検出にはいたっていない。

本遺跡の各遺構の検出面はいずれも第2層上面からであるが，第2層は往古よりの耕作により削平されていると考えられる。遺構の最下部は，各住居址の柱穴で，第5層に到達している。1号住居址の柱穴も同様であり，北部の土質の違いは，遺跡の東北隅の部分的なものと考えられる。なお，2号住居址付近には，第1層下に有機物（灰）堆積土が5～10cm堆積しており，遺構の発見，検出に時間を費やすことを余儀なくされた。

本遺跡の最も高い地点は，遺跡東北隅で，海抜27.2mである。この地点より，西南，及び南方にかけて徐々に高さを減じ，遺跡最南端との比高差は－85cmである。遺跡全面にわたり，農耕における耕地整理がなされており，北端より20m，33m，50m，67mの各地点で段を生じ，第2層が削平されている。なお畦の方向線は，松山平野の条里の方向線と合致するが，これが直ちに条里制遺構と直接関係あるのかどうかは不明であり，今後の検討を要する問題である。（Fig 1）

Tab 1

層　相	層の厚さcm	堆　積　壌　土　の　特　徴　・　備　考		
第1層	15～20	耕作土　　灰褐色腐植粘性土		
第2層	北　　端		南　　端	
	5～20	和泉砂岩風化堆積土	10～20	赤褐色粘性土
第3層	10～70	茶褐色砂質土（含礫）	10～20	和泉砂岩風化土 黄（赤）ローム　混合土
第4層	20→？	褐色砂礫	20～30	黄色粘性土
第5層			80→？	青灰色粘土 （下部に礫の堆積）

V　釜ノ口遺跡の遺構，遺物

(1)　住居址

本遺跡において，住居址と判明されたのは，竪穴式隅丸方形住居址１ケ所，竪穴式楕円形住居址２ケ所の計３ケ所であり，発掘着手順に１～３号住居址とした。

1　１号住居址　Fig 2　PL 1．2

〔遺　　構〕

本遺跡の北端に位置する本遺構は，第１次調査担当者より引継いだ時点において，竪穴式円形住居址であり，外縁に雨落し溝を持つ遺構とされていたが，柱穴の検出も無く，竪穴の掘り込み部分の検出も明確でなかったのと，さらに，床面とされている発掘終了面より，土器の出土が認められたので，確認のために補足調査を実施した。その結果，当初のプランとは全く異った遺構が存在することが判明した。当初の遺構と下部遺構とは複合するものではなく，同一遺構の発掘未了と断定，調査を実施した。

遺構は残念ながら，西側が農道の工事によって破壊されており，検出された遺構は全体の約$\frac{2}{3}$である。そのプランは，竪穴の南北において７ｍ，東西約８ｍで，約42m²の床面積を有する竪穴式楕円形住居址である。竪穴の掘り込みは，農耕時における削平のためか，北端において13cm，東端16cm，南端では僅か５cmの掘り込みであり，プラン東部に，中央部より北東，及び南東にそれぞれ3.5mの地点で，外部へ40cmの張り出しが認められた。西部は破壊されていたので確認できなかったが，特徴のあるプランであるといえる。

また，住居址内部の東北～南部にかけての周囲に床面より一段と高いフラットな部分があり，北部の最大幅0.5m，東部の同幅1.5m，南部同1.2mで，いわゆるベッド状遺構であると考えられる。なお北部においてはほぼ東西に走行する，幅10cm，深さ５～８cmの内部溝が切ってあるのが認められたが，立ち上がりに接しておらず，雨落し溝とは若干機能が異ると思われる。

最終的には，掘り込み上面から床面までの平均の深さは約28cmであり，第２層の削平を考え合せても，比較的浅い竪穴式住居址であるといえる。

住居址内部の中央部と北部の２ケ所に焼土の堆積が認められ，掘り下げた結果，それぞれ炉址と思われる掘り込みを検出した。中央の炉址は東西幅1.5m（基底部幅0.8m），南北1.1（0.6）m，深さ0.26mのやや西側が深い擂鉢状の形であり，炉址内から燃焼により表面が剝離した花崗岩の河原石２個を検出したが，それ以外は無遺物であった。北寄りの炉址は２つ

のピットからなっており，その大きさは東西幅55(25)cm，南北同50(40)cm・東西幅70(40)cm，南北同80(40)cmで，深さはそれぞれ25cmであり，中央の炉址の補助的役割を果していたものと思われる。

床面からは，5個の柱穴を検出したが，住居址のプランと合致せず，かなりいびつであったため，西部の農道の路肩の下に柱穴を想定し，掘り下げたところ，柱穴の基底部を検出することができた。その結果，柱穴は6個となった。

Tab2

柱穴番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6
柱穴の基底部の径 cm	22	23	20	21	20	22
床面よりの柱穴の深さ cm	45	47	55	57	46	30 (60)

柱穴間のプランは，南北 P 1—3.42m—P 5 / P 2—3.80m—P 4，東西P 3—5.20m—P 6であり，P 1～P 6では，P 1→東2.8m→P 2→東南2.5m→P 3→南西2.5m→P 4→西1.7m→P 5→西北2.1m→P 6→東北2.4m→P 1であり，若干，その数値は不均衡である。このことから，4本主柱（P 1，P 2，P 4，P 5）の構造でなく，P 1～P 6の6本主柱の構造であると推定される。西部の破壊によって断定はできないが，東部と同じく，両耳が張り出たプランを持っているとするならば，上屋根の構造も特徴のある形態が考えられる。

住居址内部よりは，原位置を保っていた壺形土器の底部をはじめ，複合口縁土器片など，弥生式土器の小破片，約500点を検出した。その他にガラス製小玉4個を検出した。これらの遺物の大半は，底面より上に5～10cmの間に堆積していたもので，ベッド状遺構と，フラットな床面との接点付近に集中して検出された。

〔遺　　物〕　Fig12　PL 3

第1次調査において，蛤形磨製石斧をはじめ若干の土器片の出土があったが，第1次調査担当者の見解と資料提供が無いので，本項では補足調査において出土した遺物についてのみ触れるものとする。

出土した弥生式土器片は約500点を越しているが，ほとんどが小破片であり，形態を伺い知ることのできるものは，僅かに数点にすぎない。

① 壺形土器片

- 口径17.5cm，口唇部が逆く字状に内反し，口唇端がやや垂直に近く立ち上がっており，複合口縁を形成している。口唇部，及び口縁部に櫛書きによる斜線が付けられている。赤褐色をおび，焼成は硬く良好であり，弥生時代後期の特徴を持つ土器片である。

（Fig12—1）

- 口径32cm，口唇部が内反して逆く字状をしめしているが，口唇部の施文はない。焼成は硬く良好であり，赤褐色である。朝顔口縁壺の口縁部片と考えられる。

（Fig12—2）

・ 口径19cm，口唇部がやや垂直に近く立ち上がっており，口唇部に凹線を５本配している。茶褐色で焼成は悪い。 (Fig12—３)
・ 口径14.5cm，口唇部が大きく内反して逆く字状の複合口縁をしめしているが，施文はない。焼成は悪く，黄色で，表面が剝脱している。 (Fig12—４)
・ 口径15cm，口縁部が漏斗状に外曲している。赤褐色で焼成は良好。 (Fig12—５)
・ 口径19cm，く字状に口縁部が外曲している。茶色で剝脱がはなはだしい。(Fig12—６)
・ 口径11cm，く字状に口縁部が外曲しており，褐色で焼成良好。 (Fig12—７)
・ 口径14cm，口縁部が漏斗状に外曲しており，口唇端がやや肥厚している。(Fig12—８)

② 高坏片

・ 脚部径13cm，脚部の破片と考えられる。内外面に調整のための櫛目が残存している，その他，高坏片と思われる破片が６個出土しているが，形態不詳。 (Fig12—９)

③ 土器底部片 (Fig12—10～13)

・ 10はややあげ底であるが，床面に密着して原位置を保っていた唯一の土器底部片であり，壺形土器の底部と考えられる。この底部の周囲に最も多く散乱していた土器片はFig13—１の複合口縁壺形土器の口縁部片である。
・ 11，13は甕形土器の，12は壺形土器の底部と思われる。
土器底部片はこれらの他に10個の少破片を検出しているが，形態不詳。

④ ガラス製小玉 (Fig12—14)

直径0.5cm，同0.45cm，同0.35cm，同0.41cm大であり，緑色３個，青色１個である。
この他，小玉片を２個検出している。

2 2号住居址 Fig３ PL ４，９

〔遺 構〕

２号住居址は１号住居址中心より南へ15mの地点にあり，竪穴式隅丸方形住居址である。本遺構，及び出土遺物に関しても，第１次調査担当者の見解と資料提出が無いので，同遺構に対する補足調査終了時点における記録の範囲で触れることとする。

第１次調査終了時における本遺構は，東南の隅丸部分がかなり張り出したいびつな形として検出されていた。が，その形態が隅丸方形としては，余りにもいびつであると共に，層序の項で触れた如く，有機物の堆積土が残留しており，掘り込みが東南部において不確実と判断し，補足調査を実施した。

その結果，本遺構は東西5.4m，南北5.7m，約30m²の床面積を持つ竪穴式隅丸方形住居址であることが確認された。竪穴の掘り込みは最も残存している北端において20cm，西端11cm，南端５cmであり，東端においてはほとんど掘り込み部分が削平されてしまっており，僅かに残る床面の斑点状の黒色土によってのみ識別することができる状態である。

住居址内北部より西部にかけては，幅７～９cm，深さ７cmの内溝が立ち上がりに接して切ってあり，雨落しの内部周溝と思われるが，東部と南部では検出することはできなかった。中央部のやや南寄りに，東西幅90（50）cm，南北幅70（35）cmのやや四角い炉址が設けられていた。

床面からは，柱穴が４個検出されており，そのプランは，Ｐ１→2.6m→Ｐ２→2.55m→Ｐ３→2.9m→Ｐ４→2.7m→Ｐ１であり，４本主柱の構造である。

Tab3

柱穴の番号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４
柱穴基底部の径 cm	22	24	26	20
床面よりの柱穴の深さ cm	65	70	62	71

各柱穴の最下部は第５層の青灰色粘土層に達しており，各柱穴の下部には，柱の礎板に使用したと認められる板（Ｐ１＝長さ20cm，幅15cm，厚さ７cm）が，Ｐ１とＰ３，Ｐ２とＰ４が互に対面するように，柱穴基底部に設置されていた。これらの礎板は，横でなく縦に使用されており，建築技法において興味ある形態を示している。　（PL 10）

床面を整理中に赤色珪岩のフレークを３点検出した。

補足調査において判明したのは，①プランにおいて東南隅が広がる特殊なプランでなく，一般的な隅丸方形であること。②東部に検出されていた入口らしき遺構は，有機物堆積土上に設置されており，層位の結果消滅するものである。③柱穴の下部において検出された柱の基底部分は，柱を立てるために基盤を固め，柱の沈下を防ぐための礎板である。以上の３点が確認された。

〔遺　　物〕　Fig13　PL ５～８

本遺構からは，壺形土器，高坏，甕形土器，円筒形土器等の弥生式土器を出土しており，破片にいたっては，その数おびただしい状態であった。が，それらに関しては第１次担当者の見解，資料提出がないので，土器に関しては不詳である。なお，本遺跡発掘調査団が保管している石器類と若干の土器片に関しては，本項でふれるが，出土地点，発見状況については判明しないので了承いただきたい。

①　鉄鏃

長さ7.3cm，幅約2.3cm，厚さ4.5cm，重さ7.8ｇの有茎，丸柄の鏃であり，銹化が著しい。　（Fig13—１）

②　石鏃

- 長さ1.7cm，幅1.3cm，厚さ0.3cm，重さ0.4ｇ，無茎，打製，石質は砂岩（Fig13—２）
- 長さ2.1cm，幅1.5cm，厚さ0.41cm，重さ0.6ｇ，無茎，打製，石質は砂岩(Fig13—３）

これら２個は二等辺三角形状であり，基部の抉入技法を残しているが，刃部の作りは粗雑であり，石質ももろい砂岩であるため，実用的なものかどうかは検討する余地がある。

- 長さ2.5cm，幅1.7cm，厚さ0.45cm，重さ1.5g，無茎，打製，石質は赤色珪岩 (Fig13—4)

二等辺三角形状に近く，基部は扁平である。刃は片方しかついておらず，未製品と思われる。

③ 石槍

- 長さ4.6cm，幅2cm，厚さ0.6cm，重さ6.3g，打製，石質は赤色珪岩，刃は片面しかつけられていないので未製品と思われる。 (Fig13—5)
- 長さ7.7cm，幅2.7cm，厚さ0.7cm，重さ18.7g，打製，石質は赤色珪岩，刃は両面にていねいにつけられている。 (Fig13—6)
- 長さ5.9cm，幅3cm，厚さ0.45cm，重さ10.6g，打製，石質はサヌカイト，明らかに両面共に稜を持っており，刃はていねいにつけられており，底部が一部欠損しているが，有舌ポイントである。これはA溝南部よりの出土とされている。 (Fig13—7)

これら3個のポイントは，本遺跡より出土しているが，その形状において，本遺跡の弥生時代に属するものでなく，縄文期のものと考えられる。

④ 石包丁

- 長さ9.7cm，幅3.6cm，厚さ0.55cmで磨製，石質は緑泥片岩，2穴あり，穴の径0.2，0.3cmであり，刃は両側ともつけられている。 (Fig13—8)
- 長さ9cm，幅4cm，厚さ0.4cmで磨製，石質は緑泥片岩，2穴あり，穴の径0.2cm，両端と刃部の両側は，ともに調整されており，いく分抉り込みがあることから，使用痕と考えられる。刃先はかなり鋭い。 (Fig13—9)
- 長さ10cm，幅4.8cm，厚さ0.7cm，磨製，石質は緑泥片岩，1穴，穴の径0.3cm，両端に抉入が若干認められる。刃部は両側とも調整されており，かなり刃先は鋭い，形状は台形に近い。 (Fig13—10)
- 長さ11.1cm，幅5cm，厚さ0.7cm，磨製，石質は緑泥片岩，1穴あり，穴の径0.3cm，両端に抉り込みが若干認められる。刃部は両側とも調整されており，刃先はかなり鋭い。形状は台形に近い。 (Fig13—11)
- 長さ7.5cm，幅4.2cm，厚さ0.6cm，磨製，石質は緑泥片岩，無穴で両端に剝離調整による抉り込みが認められる。刃は片側のみつけられている。 (Fig13—12)
- 長さ8cm，幅5.1cm，厚さ0.9cm，磨製，石質は緑泥片岩，無穴，両端に剝離調整による抉り込みが認められる。刃は片側のみつけられている。 (Fig13—13)
- 長さ14cm，幅5.9cm，厚さ0.8cm，打製，石質は緑泥片岩，無穴，刃は両側の一部分に，剝離によってつけられているが，石包丁としての用途としての石器であるかどうかは検討する必要がある。 (Fig13—14)

⑤ 土製管玉

長さ1.5cm，径0.7cm，穴の径0.19cm，重さ0.8gであり，焼成は軟質である。

(Fig13—15)

⑥ 砥石

長さ11.8cm，幅5cm，厚さ1.2cmで，片面になめらかな使用痕がある。石質は粘板岩である。 (Fig13—16)

⑦ 甕形土器

底部の形では判別し難いが，胴上部の内傾が少なく甕形土器と思われる。茶色，焼成は少し悪い。胴部径34cm，底部径は5.5cmで平底である。 (Fig13—17)

⑧ 円筒形土器

底部の一部のみであるが，底部径17.5cmで，底部はフラットである。焼成はやや軟質である。 (Fig13—18)

⑨ 高坏片

- 脚部径18.5cmで，孔を5つ配す。 (Fig13—19)
- 脚部径約13cmで，孔を4つ対角線に配している。

いずれも弥生時代後期の特徴を持つ。 (Fig13—20)

3　3号住居址　Fig 4　PL 11～14

〔遺　　構〕

3号住居址は2号住居址中心より南へ32mの地点にあり，本遺跡の住居址としては，最南端に位置しており，北部の1号住居址との床面における比高差は－50cmである。

3号住居址は，その平面において，ほぼ完全に原形をとどめており，そのプランは長径（東西）6.5m，短径（南北）5.7mの約32m²の床面積を持つ竪穴式楕円形住居址である。竪穴の掘り込みは，第2層の赤褐色粘性土より掘られており，掘り込みを最も残している北端で，床面まで37cm，浅い南端で24cmであり，立ち上がりはほぼ垂直である。立ち上がりに接して，幅12～25cm，深さ10～18cmの雨落しの内部溝が，西南隅を除いてほぼ一周している。

東南部の掘り込み外縁に，幅1m，長さ0.9mの造り出しが検出され，その掘り込みは，住居址内部にむかって次第に傾斜を増しており，住居址内上層と同じ有機物堆積土があった。この窪みを下部まで掘り下げた結果，東側に小さなピット（径5cm大）を4個検出した。これらのことから，この造り出しは本住居址の入口と認められる。

入口から内部中央にむかって，長さ0.9m，幅1.1m，厚さ5～20cmの，やや扇形の粘性土の堆積が認められた。この堆積土は，内部周溝を埋めており，かつ堆積土を排除した結果，その下部（住居址床面）より，砥石，土製丸玉を検出したので，この堆積土は本住居址の使用，もしくは廃絶後の過程において，入口部の傾斜により土砂が流入し，堆積したものと考えられる。

入口部が明確に検出された遺構は全国的にもその例が少なく，上屋根と入口との相互関係に，具体的な例を示した顕著な遺構といえよう。

住居址内中央，やや南寄りに焼土が多く堆積しており，これを除去した結果，東西幅80(20)cm，南北幅70(15)cm，深さ55cmのやや方形の炉址を検出した。炉址の内部からは，掘り込みの上部において，東と西の２ケ所に16cm×10cm，17cm×12cm大の花崗岩と砂岩の河原石２個があり。炉址基底部までに堆積していた真黒な灰の中からは，土器片12個，ガラス製小玉１個，11cm×４cm×３cm大の角い杭材，20cm×12cm×１cm大の板材を未燃焼のまま検出した。前者の材質は松，後者の材質は杉と思われる。また山桃と思われる種子１個，燃焼したワラ状の炭化遺体を多数検出した。炉址底部は青灰色粘土層に達していた。

炉址の周囲には，第３層中のロームのやわらかい黄色砂質土が盛られており，0.7cm×0.6cm大の小さな円礫が二重に敷きつめられており，炉址南西部では，桧の樹皮細片がかなり検出されており，住居内における生活用式の一端を伺い知り得るものである。

床面において，４個の柱穴を検出した。そのプランは，Ｐ１—2.65m→Ｐ２—2.33m→Ｐ３—2.35m→Ｐ４—2.42m→Ｐ１で４本主柱の構造である。この４個の柱穴の基底部を確認の際に，いずれの柱穴にも木質が残存していることが判明した。第２号住居址の如く礎板とも考えられるので，調査最終段階において，Ｐ１，Ｐ２を北面より，Ｐ３，Ｐ４を南面より切断，柱穴の断面を露呈させた。その結果，いずれの柱穴の基底部にも柱材が残っていることが確認された。どの柱穴も，第５層の砂礫の堆積している，比較的固い個所まで，いくぶん袋状に掘り込んでおり，砂礫の上に柱を乗せた形となっている。柱の最下底部は切断調整されているが，鋸による切断でなく，鉄斧による切断であり，表面は手斧による調整がなされている。

また，これらの主柱の断面において，Ｐ１には２個の，Ｐ２とＰ３には各１個の主柱穴より若干浅く，小さい柱穴が検出され，やはり柱が残存していた。これらは，主柱の添木としての副柱の役割を持つものと考えられる。主柱がほぼ垂直であるのに対し，副柱はそれぞれが若干外側に傾きを持っており，上屋根の構造にも関連があるものと考えられる。

柱材の直径は平均15cmであり，当時の建材の大きさを伺い知り得る。材質については鑑定依頼中であるが，４本とも樫，もしくは荒樫と考えられる。（PL 19～21）

Tab4

柱穴の番号	Ｐ１	Ｐ１副．西	Ｐ１副．南	Ｐ２	Ｐ２副	Ｐ３	Ｐ３副	Ｐ４
柱の径 cm	14	6	8	15	6	15	7	16
床面よりの柱穴の深さcm	75	40	35	80	35	74	37	65
残存する柱の長さ cm	52	20	15	56	20	56	19	46

その他，住居址内部においてＰ４の西側に仕事石に使用したと思われる，表面を研磨した40cm×30cm×20cm大の砂岩の河原石が設置されていた。床面はほぼフラットであり，第３層

中の黄色ローム土が厚さ３～５cm敷きつめられていた。おそらく，この黄色ロームは張床として意識的に盛られたものと考えられる。

〔遺　　物〕　Fig14　PL 15～18

本遺構からは，弥生式土器片126個を検出したが，総数が少なく，土器の形態を伺い知るものは極めて少ない。他に，石鏃1個，ガラス製小玉３個，土製丸玉１個，砥石１個を検出した。

①　壺形土器片

- 口径42cmと大きく，口唇端が肥厚し，口唇部に３本の凹線を配している。赤褐色で焼成は硬く良好である。朝顔形の壺の口縁部であり，弥生時代後期前半の特徴を持つ。（Fig14—１）
- 口径25cm，口唇端が肥厚し，口唇部に２本の凹線を配している。黄色で焼成が悪く，表面が剥離している。（Fig14—２）
- 口径18.5cm，口唇部がやや外曲している。施文はなく焼成は良好。（Fig14—３）
- 口径13cm，口縁部が漏斗状に外曲している。褐色で焼成は良好。（Fig14—４）
- 口径7.5cm，口縁部が直立しており，直口壺と思われる，黄褐色で焼成は悪い，炉址の内傾面より出土している。（Fig14—５）

②　鉢形土器片

- 口径17cm，口唇は丸味を持っている。茶褐色で焼成は悪く表面が剥離している。（Fig14—６）
- 口径15.5cm，器高がやや低く，碗に近い形状である。（Fig14—７）

③　高坏片

- 坏の底部の部分だけであり，坏上部，脚部は欠損。稜が明確である。推定口径約27cm，焼成良好，内面をふせた状態で炉址内傾面より検出している。（Fig14—８）
- 坏の稜部のみであるが，稜部に凹線を３本配している。推定口径約25cm。（Fig14—９）
- 脚部のみである。脚径18cm，稜を持ち，上下にすかし孔を持つ，焼成は悪い。（Fig14—10）

④　土器底部片

- 11は平底で甕か鉢，12は平底で壺，13はあげ底で甕のそれぞれの底部と思われる。（Fig14—11～13）

⑤　石鏃

長さ２cm，幅1.6cm，厚さ0.3cm，重さ0.7ｇで二等辺三角形状をなし，刃はていねいに剥離調整されており，基底部の抉り込みも大きい。石質はサヌカイトである。（Fig14—14）

⑥　ガラス製小玉

直径0.45cm，0.4cm，0.38cm大であり，色はいずれもコバルトブルーである。

(Fig14—15)

⑦ 土製丸玉

直径2.7cm，高さ2.2cm，孔径0.2cm，重さ15.4g，焼成は硬く茶褐色。(Fig14—16)

⑧ 砥石

長さ21cm，幅6cm，厚さ平均3.2cmの粘板岩製で3面が研磨されており，使用によるすり減りがみられる。 (PL —15)

(2) 建造物址

本遺跡において，何らかの構造を持つ建造物があったと認められる遺構は，前項の住居址以外では，6ケ所に認められ，調査区域外に及んでいるものを加えるならば11ケ所である。ここでは調査区域内遺構にとどめる。

1 1号建造物址

本遺構に関しても第1次調査担当者の見解，資料提出が得られないので，補足調査による結果を記録する。

1号建造物址は，1号住居址中心より東に10mの地点に位置し，後述する溝状遺構の上に形成されていて，発掘により判明したプランは，全体の約$\frac{2}{3}$である。そのプランは南北3.4m，東西約3.5m，約12m²の床面積を持つ方形のプランを持っているものと推定される。掘り込みは浅く，北端で3cm，東端で2cm，南端においては僅か1cmを越えていない。したがって，竪穴式あるいは平地式とも判断しかねる状態である。内部東北に寄った地点で50cm×20cm大の長楕円形の焼土の堆積が認められたが，炉址としての窪地は無く，焚火の跡とも考えられる。

本遺構に関して，第1次調査担当者は竪穴式住居址としているが，プランの規模，及び床面において柱穴等を検出しておらず，外縁部，周囲においても同様であり，住居址としての積極的な遺構の検出はない状態である。もちろん，第2層の削平を考えれば，竪穴，あるいは簡単な仮設の住居であったことを否定するものではないが，考古学上のいわゆる生活の場所としての住居址のカテゴリーからは除外されるものと思われる。なお同遺構からは土師式土器片が出土している。

2 2号建造物址 Fig 5 PL 22～23

本遺構は，後述の溝状遺構を検出するためにA溝の延長線上を発掘中，検出したもので，6個の柱穴を主体とする建造物址であり，以下6号にいたる建造物址は本遺構と同様の形態である。これらの遺構は6個の柱穴の検出のみであり，付随する遺構もなく，壁を持つ平地

式住居なのか，掘立式の住居（倉庫）なのか，あるいは高床式の倉庫を意味するものであるか，その構造と機能においても半別し難いが，倉庫的性格を持った遺構と考えられる。

柱穴内部より，弥生式土器片を検出しているが，柱穴内への落ち込みが考えられ，弥生期の建造物とするのは早計である。本遺跡の２～６号までの６本柱建造物の相互的な年代に関しては，その柱穴の掘り込み技法において大差のないものと思われる。国道11号バイパス線上の発掘中の各遺跡において，８本，10本，12本，14本柱の建造物址が多数検出されており，それらの遺構の柱穴は深く，かつ巨大であり，本遺構の６本柱建造物が先行形式であるか，退化形式であるかは，これらの相互研究を待って，将来あらためて検討しなければなるまい。

２号建造物址は，３号住居址より北に15mの地点に位置しており，そのプランは，桁行（Ｐ１—2.36—Ｐ２—2.30—Ｐ３ Ｐ４—2.42—Ｐ５—2.42—Ｐ６ m），梁間（Ｐ１—4.06—Ｐ４ Ｐ３—3.90—Ｐ６ m），約19m²のプランであり，Ｐ１，Ｐ２の柱穴は二重に掘られている。Ｐ４，Ｐ５の柱穴内部より弥生式土器片を検出した。柱穴の深さはＰ４が最も深く，他は浅い。これは３号建造物址においても同様であり，柱を立てる時の工法の手順によるものと考えられる。

Tab5

柱穴の番号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６
柱穴基底部の径 cm	18	24	17	15	20	23
床面よりの深さ cm	14	35	10	50	35	15

3　3号建造物址　Fig 6　PL 22～23

本遺構は３号住居址より北西13mに位置し，１号建造物址と最も接近する個所で3.5mの間隙を持つ。本遺構のプランは桁行（Ｐ１—2.36—Ｐ２—2.48—Ｐ３ Ｐ４—2.27—Ｐ５—2.32—Ｐ６ m），梁間（Ｐ１—3.22—Ｐ４ Ｐ３—2.96—Ｐ６ m），約14m²の床面積を持っており，Ｐ２，Ｐ５，Ｐ６の柱穴内部より弥生式土器片を検出した。

Tab6

柱穴の番号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６
柱穴基底部の径cm	30	30	30	29	20	20
床面よりの深さcm	10	13	13	3	16	27

4　4号建造物址　Fig 7　PL 22

本遺構は２号住居址より南へ18m，３号住居址より北西に17mの地点に位置しており，３号建造物址との最も接近する距離は1.5mである。本遺構のプランは桁行（Ｐ１—2.10—Ｐ２ Ｐ４—2.0 —Ｐ５—1.98—Ｐ３ —2.10—Ｐ６ m），梁間（Ｐ１—2.72—Ｐ４ Ｐ３—2.72—Ｐ６ m），約11m²の床面積を持っており，柱穴の間隙は極めて正確で，尺度の使用も十分に考えられる。同類の建造物址の中では最小のプランである。

Tab7

柱穴の番号	Ｐ１	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｐ５	Ｐ６
柱穴基底部の径cm	23	16	22	20	21	17
床面よりの深さcm	18	26	23	11	5	10

5　5号建造物址　　Fig 8

本遺構は3号住居址の南に隣接して位置しており，1部分は3号住居址の入口部分，及び後述の土坑Gと重複している。本遺構のプランは，桁行（P1—1.62—P2—1.67—P3 / P4—1.72—P5—1.79—P6 m），梁間（P1—3.26—P4 / P3—3.17—P6 m），約11m²の床面積を持っており，桁行と梁間の長さが接近している。

Tab8

柱穴の番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6
柱穴基底部の径cm	15	20	23	17	23	17
床面よりの深さcm	14	15	20	15	15	25

6　6号建造物址　　Fig 9

本遺構は2号住居址より東に5mの地点に位置しており，相互の最も近接する距離は1.7mである。本遺構は第1次調査の際にP5，P6の柱穴が検出されていたが，補足調査の実施により，溝状遺構のA溝第1消滅地点を再調査の結果，他の柱穴が検出され6本柱の建造物址と確認された。

本遺構のプランは，桁行（P1—2.05—P2—2.10—P3 / P4—2.07—P5—2.11—P6 m），梁間（P1—3.05—P4 / P3—2.95—P6 m），約12.5m²の面積を持っており，A溝上に形成されており，床面は凹凸がはなはだしい。溝のため，土が軟弱であるためか，P5，P6の柱穴には柱の基底部，及び根元を固めるためにつき固めたと思われる黄色粘土が検出されている。この粘土は，土坑C・Dに蓄積されていた粘土と同質である。

Tab9

柱穴の番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6
柱穴基底部の径cm	16	21	17	14	15	16
床面よりの深さcm	23	20	35	36	30	25

(3)　溝状遺構

〔遺　　構〕　Fig 1　PL 25

本遺跡の北端部より南に延びる南北溝と，これに合流，交差する5本の東西溝，及び3号住居址より南の東西溝を総称して溝状遺構とする。本項では，本遺構に関する第1次調査担当者の見解，及び資料提出が無いので，補足調査終了時点において測定，確認した事象について総合的にふれるものとする。

1　南北溝（A・B溝）

遺跡北部よりやや湾曲しながら南へのびる本遺構は，最大幅1.3m，最小幅0.85mで，第1消滅地点までの長さ約40m，溝の深さは北端において地表下—28cm，第1消滅地点同—7cm，再出現地点同—9cm，再消滅地点—14cmであり，南へ下ると共にその深さは次第に浅くなっ

ている。第１消滅地点では第２層の削平，及び地形が少し窪んでおり，溝としての遺構は検出されていない。再出現地点より南へ２ｍの地点で西へ延びるＢ溝は，その掘り込み層位，及び堆積土からＡ溝から分岐する溝と考えられる。Ａ溝は第１消滅地点より南へ約12ｍの地点で再び消滅する。これはこの個所で第２層が耕地整理のために削除されたためと考えられる。

３号住居址より北方９ｍ及び東北９ｍの地点にかけて，Ａ溝に堆積していた有機質土と同質の土が僅かに斑点状に残っており，おそらく第２消滅地点よりさらに南にゆるやかに傾斜しながら延びていたものと推定される。

2　東西溝（Ｃ．Ｄ．Ｅ．Ｆ．Ｇ．Ｈ溝）

- Ｃ溝　西方よりＡ溝へ合流する。長さ約９ｍ，幅40cm，深さ14cmであり，西端においてＤ溝と合流する。
- Ｄ溝　長さ約14ｍ，幅40cm，深さ16cmであり，Ａ溝上で交差し，かつ東方にさらに延びていると思われる。
- Ｅ溝　長さ約14ｍ，幅40cm，深さ17cmであり，Ａ溝上で交差し，かつ東方にさらに延びていると思われる。
- Ｆ溝　長さ約7.5ｍ，幅60cm，深さ30cmであり，東方よりＡ溝に合流する。また土拡Ｂと複合している。Ｆ溝内は真黒な灰が堆積していた。
- Ｇ溝　長さ約15ｍ，幅70cm，深さ14cmであり，東方よりＡ溝と交差し，さらに西方へ延びていると思われる。Ａ溝との交差地点より西へ２ｍの地点で南に２ｍの袋状の溝を付随させている。
- Ｈ溝　長さ約6.5ｍ，幅35cm，深さ20cmであり調査区域外に東西に延びていると思われる。同溝内からは弥生式土器片45個（内底部片２），土師器片12個を検出したが，いずれも摩滅，小破片であり，形態を伺い知るものは無い。

これらの溝状遺構を総合的に見地するに，Ａ，Ｂ溝はその溝内より出土する土器の絶対量から，１～２号住居址と相前後して設置されたものと考えられる。また東西溝のＤ，Ｅ，Ｇ溝は明らかにＡ溝の上に設置されており，若干時期が下ることも考えられなくはない。これらの溝の使用期間に関しては，汚泥沈澱物が認められず，また細流砂の堆積もあまり見られないことから，常時通水していたものではなく，有事に通水したものと考えられ，また存続期間も長きには到らなかったものと考えられる。

したがって，これらの溝状遺構の性格は，農耕に必要とする水の導水，及び入，排水を目的とし，または，住居址との関連があるならば，生活用水を得るための目的を持った遺構であると考えられる。

Ａ溝がやや湾曲していることから，環状溝とする見解もあるが，発掘区域が限られている範囲内での本遺構と住居址との相互関係，また隣接する地域の発掘がなされてない段階にお

いては，環溝とするのは早計であると判断される。同種の遺構が国道11号バイパス遺跡内にも検出されつつあり，現時点においては上述の如く，農耕もしくは生活用水収得のための溝状遺構と考えるのが妥当ではなかろうか。

〔遺　　物〕　Fig15　PL 26～30

溝状遺構からは，特にA溝中より多数の土器類を検出しているが，その形態の細部等については第1次担当者の見解を得られていないので，発掘調査団が保管している若干の土器片についてのみふれるものとするが，出土地点については不詳のものが多いことを了承いただきたい。

① 壺形土器片

- 口径13cmの複合口縁で，口縁部が逆く字状を示し，口唇部が大きく，高く内反しており，口唇部に，櫛による流水文が2列施文されている。赤褐色で焼成は硬く，良好，A溝北端より出土している。（Fig15—1）
- 口径13.5cm，複合口縁で，口縁部が逆く字状を示し，口唇部が内反しており，口唇部に櫛による流水文が施文されている。格子目のはりつけ突帯が配されている。焼成は良好。（Fig15—2）
- 口径18cm，複合口縁であるが，口唇部がやや開いている。施文は無い。黄色で焼成は悪くて剝脱している。（Fig15—3）
- 口径16cm，複合口縁であるが，口唇部が垂直に立ち上がり，いわゆる煙突状となっており，弥生時代後期終末期の特徴を持っている。茶色で焼成は非常に悪く剝脱が目立つ。（Fig15—4）
- 口径21cmで，口縁部が漏斗状に外曲しており，口縁部に櫛による調整がされている。茶色で焼成は良好。（Fig15—5）
- 胴部径31cm，底部径6.5cmで平底である。首と胴の一部に櫛目が見られる。茶褐色，焼成良好，A溝消滅地点で出土している。（Fig15—6）

② 甕形土器片

- 胴部径22cm，底部径3.6cmであげ底である，底部にしぼりが見られる。褐色で焼成は良好，胴部に煤が付着している。（Fig15—7）

③ 底部片

- 底部径4.5cm，あげ底であるが壺か鉢の底部と思われる。（Fig15—8）

(4) 土　　坑

本遺跡において検出された土坑は7ケ所である。

- A土坑

東西1.3m，南北1.9m，深さ15cmの楕円形の土坑である。内部に黒褐色土が堆積していたのみで，無遺物である。

- B土坑　Fig10

F溝に接しており，東西1.1m，南北1.8m，深さ78cmである。本土坑は東壁が底部からほぼ垂直に立ち上がり，東西の壁に径4～6cm，深さ10～15cmの穴が穿ってあり，また，土坑の東側に幅12cmで半円状に黄色粘土が厚さ3cmに積まれており，西側にも一部分残存している。土坑の内部は底部まで真黒な灰が堆積されており，掘り込みの上部の一部分は燃焼によって赤色に変化していた。これらのことから本土坑は平窯の一形態と考えられようが，それを示す遺物は検出されなかったので，今後の同類の遺構の発見による検討を必要とする問題である。

- C土坑　PL 31

直径1mのほぼ円形で，深さ20cmであり，土坑内に黄色粘土が土塊状に蓄積されていた。

- D土坑

いびつな形で，深さ30cmであり，一部分にC土坑と同じ粘土が蓄積されていた。

- E土坑

東西1.3m，南北0.9m，深さ0.92mとかなり深く，掘り込みも垂直である。底部まで灰が堆積しており，2号住居址に関連するサイロス的土坑とも考えられる。無遺物。

- F土坑

東西1.2m，南北0.9m，深さ0.65mであり，E土坑同様，灰の堆積が見られた。無遺物。

- G土坑　Fig11　PL 32

4号建造物と一部重複しており，東西3.75m，南北最長幅1.3m，最深部0.7mであり，東西に長く，中央部が低い擂状の掘り込みである。本土坑より南に，幅15cmの半円状の溝と，それに合流する幅13cmの溝が掘られているが，この溝も本土坑に付随する遺構と考えられる。

掘穴の内部は底部まで真黒な灰が堆積しており，中央底部より＋20cmの個所で，いわゆる窯ア㋕を一片検出しており，本遺構も平窯の一形態と推定されるが，それを示す遺物等の検出はなかった。B土坑と共に今後の検討の課題であると思われる。

(5)　特殊遺構

本遺跡の最北端に東西5m，南北3.6m，深さ16cmの掘り込みがありその中央部に直径約2mの円形状の平坦部を持つ造り出しが認められる，遺物も全くなく，遺構の性格等と共に全く不詳である。

Ⅵ 総　　括

釜ノ口遺跡全体についての報告は，出土資料すべてを細詳に検討していないので不可能である。たゞ溝状遺構，２号住居址等の遺物は少ないものゝ，遺構については若干知見しているので簡単に触れておきたい。

釜ノ口遺跡の遺構は住居址３．建造物址６．土坑７．溝状遺構８．小環溝状遺構とでも称し得るもの１である。

⑴　遺跡の時期

遺跡の時期は，各遺構から出土する土器によってほゞ明らかになる。それゆえ，各遺構の時期は土器の時期を検討することでこれにかえたい。

１号住居址から出土する壺形土器は，形態的に大別すると三群に分類される。その一は大きく「逆く」字状に内反する複合口縁を有するものであり，その二は口縁部が大きく朝顔に外反し，口縁端がやゝ内反ぎみに僅かに立ちあがり，その拡張面に数条の凹線文を持つものである。三は前二者と相違し，甕形土器の形態に類似し口縁部が球状に外反したり，「く」字形口縁を有するものである。「逆く」字状に内反する複合口縁は，小松町や石井北遺跡（註１）,北条市の柳ケ内遺跡，宇和町郷内出土の郷内式土器（註２）と酷似している。他地方である東九州では安国寺（註３）,北九州では柳本，諏訪遺跡出土の下大隈式土器（註４）に類似性を求めることができる。二は基本的には中期後半の紫雲出山Ⅱ～Ⅲ式（註５）や桧端（註６）,由利島（註７）,立石山，榎坂遺跡（註 8）の凹線文の施文手法を踏襲しているものの，直接的には八堂山Ⅰ．Ⅱ式土器（註９）の影響下に発達したものであろう。三は八堂山Ⅲ式土器そのものであり，他地域では山口県の伊倉Ａ上層出土の壺形土器（註10）に類似性を求めることができる。

器台形土器は，県内では初見であるが，伊倉や須玖本郷（註11）から出土している。

以上のことから，１号住居址床面上出土の土器群は八堂山Ⅱ式土器の影響下に発達したといわれる八堂山Ⅲ式土器の範疇に入れるべきもので，後期後半に位置づけられよう。

２号住居址は遺物そのものを細詳に検討することができないが，発掘過程において観察する限りにおいては１号住居址に後続する後期終末の土器群であるとみて間違いない。

３号住居址からは甕形土器，鉢形土器と高坏が出土している。壺形土器は口縁部が大きく外反し，凹線文ないしはそれに近い施文手法を持つ一群と，口縁部が「く」字形にゆるやかに外反または直立し，無文化している一群に分類される。前者は形態的には岡山県の芋岡山

A遺構伴出の壺形土器（註12）や，八堂山II式に酷似しており，先行する紫雲出山III式土器や桧端式土器等の凹線文の影響を直接に受けついでいる。

後者は凹線文が殆んど消滅しており，八堂山II式土器の中に酷似するものを認めることができる。なお，1号住居址出土の壺形土器に類似するものが一部あるが，細部にわたって検討すると若干の相違がある。それは1号住居址の壺形土器の口縁部が外反するも立ちあがりぎみで短いのに対して，3号住居址出土の壺形土器は大きく外反し，口縁部から頸部にかけての部分が長くなっていることである。このことは1号住居址中の壺形土器は，3号住居址中の壺形土器から発展したものであり，壺形土器そのものの形態的変遷を知る資料を提供してくれたものといえる。鉢形土器は底部が欠損しているが口縁部から胴部にかけては，八堂山F号住居地中より出土する八堂山II式の鉢形土器と全く同形態である。

高坏は坏底端に凹線文が施文されているものと，ないものがあるが，いずれも坏底端が鋭角となっており，この点においては八堂山F号住居址出土のII式の高坏に類似するも若干先行形態を示している。同時期に盛行していた天山式土器（註13）の高坏は，坏部端がそれほど鋭くなく退化ぎみであり，口唇部に凹線文を持っている点共通性を有しているが，やゝ時間的な差位をもって後続していたものであろう。

以上が3号住居址床面上から出土したものであるが，全体を通観すると，紫雲出土II．III式土器（註14）や，県内の桧端式土器（註15），八堂山I式土器，さらに立石山，榎坂遺跡（註16）出土の凹線文手法を基調としながらこれに後続して発展した土器群であり，後期前半，それも初頭に位置づけされるものであろう。

この後期前半の土器群と同時期に盛行していたものは八堂山II式土器や大空式土器（註17），松山平野では天山式土器であろう。将来，中期後半から後期前半にかけては凹線文を施文手法とす莫大な資料が得られつつあるので（註18），編年を再検討しなければなるまい。

以上のことから1号住居址は弥生後期後半の時期であり，2号住居址は弥生後期終末，3号住居址は弥生後期前半の時期である。

(2) 遺　構

時期的に古い3号住居址のプランは，ほぼ同時の八堂山A号，F号住居址や，椋ノ原山の円形ないしは小判形の住居址（註19）と同じであり，この平面プランは，弥生中期中葉以降からの流れを汲むものであろう。

3号住居址で特筆すべきことは，明瞭な入口を持つこと、，中央部に設けられた炉址の北部周辺の薄く盛土した上面に径1cm前後の緑色片岩の偏平な川原石が敷かれていたことである。住居の入口部が明瞭に検出された点は，住居形態のみならず集落形態や，当時の日常生活を明らかにするうえで貴重なものである。入口が南に設けられているのは，日照に関係し

ていると理解するのが最も自然な姿であろう。

炉址の北部，即ち入口に向った部分の一区画にのみ小さな川原石が敷き詰められていたことは，近年まで県下の農山村に残っていた「いろり」を取りまく座の形態に酷似していることから推考すると，住居内において一定の座が定められていたのではなかろうか。恐らくはこの特殊な一画は家長的な人物の座であったものと考えられる。

弥生後期後半の１号住居址は，道路が存在したことによって完掘することができなかったが，その平面プランは３号住居址と同形である。柱穴数が異なるのは，県下の他の遺跡の例からすると時期的な相違ではなく，単に住居址の規模によるものであろう。

１号住居址の特徴はベット状遺構が存在することである。このベット状遺構が何を意味しているかは現段階では明らかでない。他の２．３号住居址が同時期のものであればまたその存在理由の検討も可能であるが，今回の調査ではその点が明確でなく今後資料の増加を待つ以外に方法はないように思われる。たゞベット状遺構は松山平野においては中期後半に溯ることが県営運動公園内の弥生期住居址の発掘等によって明らかになりつつある。

２号住居址は１号，３号住居址とは異なり，隅丸方形でその規模も小さい。県下で方形プランの住居址が明らかになっているのは中期であるが，これが一般化するのは弥生後期後半からで，このような傾向は山口県の右田，一丁田遺跡（註20）でも認められている。

本遺跡北部で検出された溝状遺構は大小二種存在するが，これがいかなる目的，用途で構築されたのかを結論づける資料には不足する。

溝状遺構は，墓域の境界，即ち聖域をあらわすとする考えや（註21),集落を区画するとする考え方（註22),さらに農業用として設けられたとする考え（註23）と種々ある。しかし，溝状遺構は時と場所，或は文化の相違によって目的，用途が違っていると考えるほうがより妥当であり，単一の目的，用途として画一的にとらえることは問題を複雑にしているのではなかろうか。

本遺跡の大きな溝状遺構は，溝中に弥生後期後半から終末にかけての土器が非常に多く検出されたことから，ほゞこの時期のものであろう。しかし，１号建造物址がこの溝の上に残った状態で検出されているので，少なくとも古墳時代初頭にはすでに破棄されていたものとみられる。さて，本溝状遺構の目的，用途であるが，大きい溝は少なくとも有事の時に水が流れていたことは動かし難い事実である。しかし，それが直接農業用の水路であるとすることはできない。大きな溝の東側に２～３個の窯跡とみられる土坑と，土器製作用の粘土が寝かせてある土坑が検出され，さらに加えるに遺跡北部一面に異常とも思える厚さで黒色灰土層が堆積していることとを考えあわせると，土器製作に何んらかの関係があったのではなかろうか。そう考えると溝中に多くの土器が堆積し，２号住居址中から厚さ30cmにわたって異常と思える土器片が堆積していたことに説明がつくように思える。

大きな南北に走行する溝に対して直交する小規模な溝は，Ａ溝に流入するように作られた

排水構ではなかろうか。これら溝状遺構に関する考えも単に一つの可能性を示すに留まる。

本遺跡から検出された建造物址は6ケ所であるが，1号建造物址が土師器を伴なう以外は時期を決定する資料に欠ける。1号建造物址は古式の土師器が出土することから，2号住居址に若干の時間的差異を有して後続していたものであると想定する。

2号～6号建造物址は1号と異なるものの，これが高床式倉庫址であるのか，平地式住居址であるのかも不明である。これに加えて時期を明らかにすることも困難である。ただプランはいずれも6本柱であり，形態的には同時期のものであろう。建造物址のピット中から弥生式土器が検出されたり，ガラス小玉が検出されたりしていることは事実であるが，これが直ちに弥生時代の遺構であると断定する決定的資料とはなり得ない。なぜならばこの建造物址の周辺から須恵器片も若干ではあるが出土しているからである。この建造物址と類似するものを近辺に求めるならば山口県宮原遺跡のそれが最も類似する。（註24）この建造物址の時期については周辺遺跡の調査の完了時点でさらに検討を加えたい。

この他の遺構としては各種の土坑が検出されているが，これも出土遺物が殆んど伴出していない状態からして明確なことは判明しない。ただ窯跡的な色彩を有するＢＧ土坑がある反面，貯蔵穴とみられるＥ・Ｆ土坑もあって多様性を有している。

特殊遺構とされる小環溝遺構は，全く遺物が伴出していないので，いかなる時期，目的用途を持ったものであるのか不明である。

(3) 遺　物

本遺跡出土の遺物は，弥生式土器以外では石包丁，石鏃，鉄鏃，石槍，ガラス小玉，砥石，土玉，桃核の炭化遺体，杭，柱材，礎盤等である。

このうち石包丁は若干数量的にも多いが，石鏃等の石器類が極端に少ない。特に3号住居址などは同時期の高地性遺跡である八堂山遺跡に比較しても石器類の減少は顕著である。このことは，換言すればすでに石器類に変って鉄器の使用が一般化していたといっても過言でない。鉄器は2号住居址中の鉄鏃1個のみであるが，3号住居址中から出土した青灰色粘板岩製の砥石の出土からもそのことが伺い知れる。この大形の砥石が現代の仕上用砥石に優るとも劣らないものであることからも理解できる。

ガラス小玉や土玉の出土は当時の装飾の有様を理解することができ，2号，3号住居址から出土した柱材や礎盤からは当時の住居の基礎構造を知ることができる。今後は住居の構造的な面や建築学的な面でも大いに参考となろう。

以上が発掘によってわれわれの得た知見であるが，発掘面積が極限され，遺跡の一部を発掘した結果ですべてを判断することは危険であるので，今回は一応概報的な報告に留め，隣接する関連遺跡の発掘が完了した段階において，改めて細詳な報告，論究を試みたい。

参考文献

註 1　愛媛県教育委員会編『文化財読本・埋文編』（県教育委員会）

2　長井数秋『南伊予地方における弥生式土器』（西条農業高校研究紀要第１号）1966

3　杉原荘介・小林行雄『弥生式土器集成・資料編』

4　九州考古学会編『北九州古文化図鑑』1950

5　小林行雄・佐原真『紫雲出』（詫間町文化財保護委員会）1964

6　杉原荘介・小林行雄『弥生式土器集成・資料編』
松岡文一『愛媛県桧端遺跡の弥生式土器』（私たちの考古学１の２）1954

7　正岡睦夫『愛媛県温泉郡中島町弥生遺跡』（古代学研究71号）

8　長井数秋『愛媛県越智郡生名村立石山遺跡の弥生式土器について』（ソーシアル・リサーチ）1974

9　長井数秋・大山正風他『八堂山』（西条市教育委員会）1972

10　小野忠凞・斉藤定・冨士埜勇・山本一朗他『伊倉遺跡調査報告書』（山口県教育委員会）1973

11　小田冨士雄氏の御教示による。

12　間壁忠彦・間壁葭子『岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告書』（矢掛町教育委員会）1968

13　長井数秋他『伊予天山遺跡調査報告書』（松山市教育委員会）1972

14　５に同じ

15　６に同じ

16　９に同じ

17　６に同じ

18　愛媛県教育委員会が調査主体の県営運動公園内の谷田Ⅲ，Ⅳ，釈迦面山，西野Ⅰ，Ⅱ，Ⅲの各遺跡の住居址から，凹線文を中心とする莫大な土器が出土している。

19　大山正風他『椋ノ原山遺跡調査概要』（愛媛県考古学研究会第１回研究発表要旨）

20　辻田耕次他『右田・一丁田遺跡調査報告書』（山口県教育委員会）

21　森江直紹・辻田耕次・内田悟他『宮原遺跡調査報告書』（山口県教育委員会）

22　和島誠一・田中義昭『日本の考古学―住居と集落』Ⅲ，1966

23　葛原克人・正岡睦夫他『雄町遺跡調査報告書』（岡山県教育委員会）1972

24　21に同じ

Fig 1 釜ノ口遺跡全体測量図・断面図

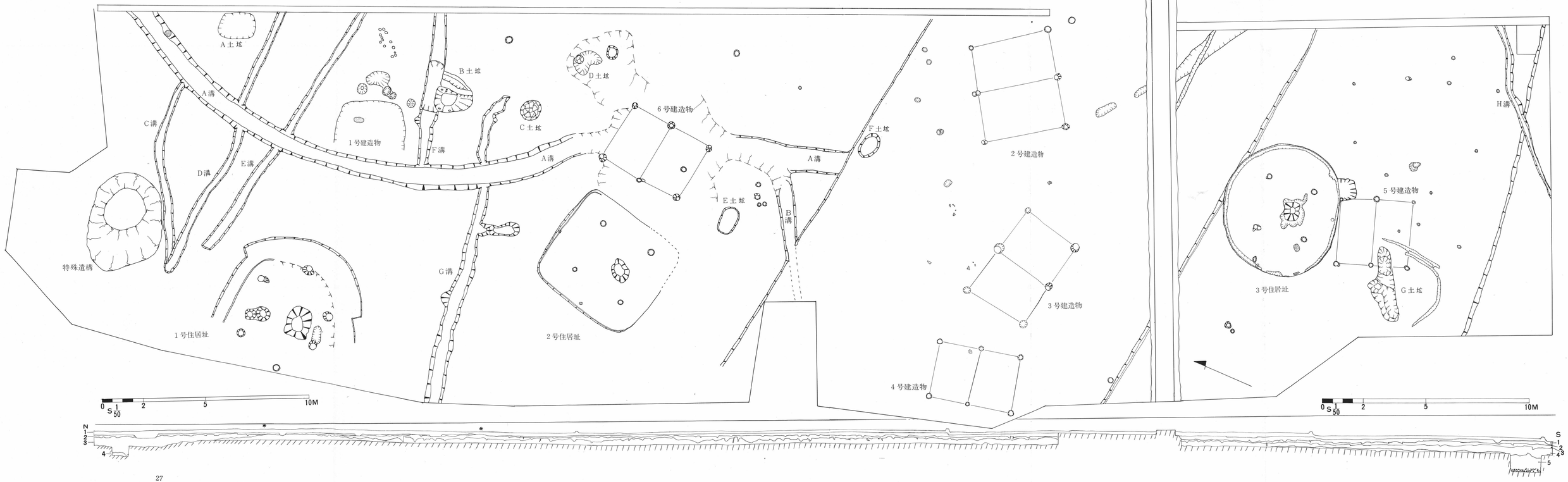


Fig 2 1号住居址平・断面測量図

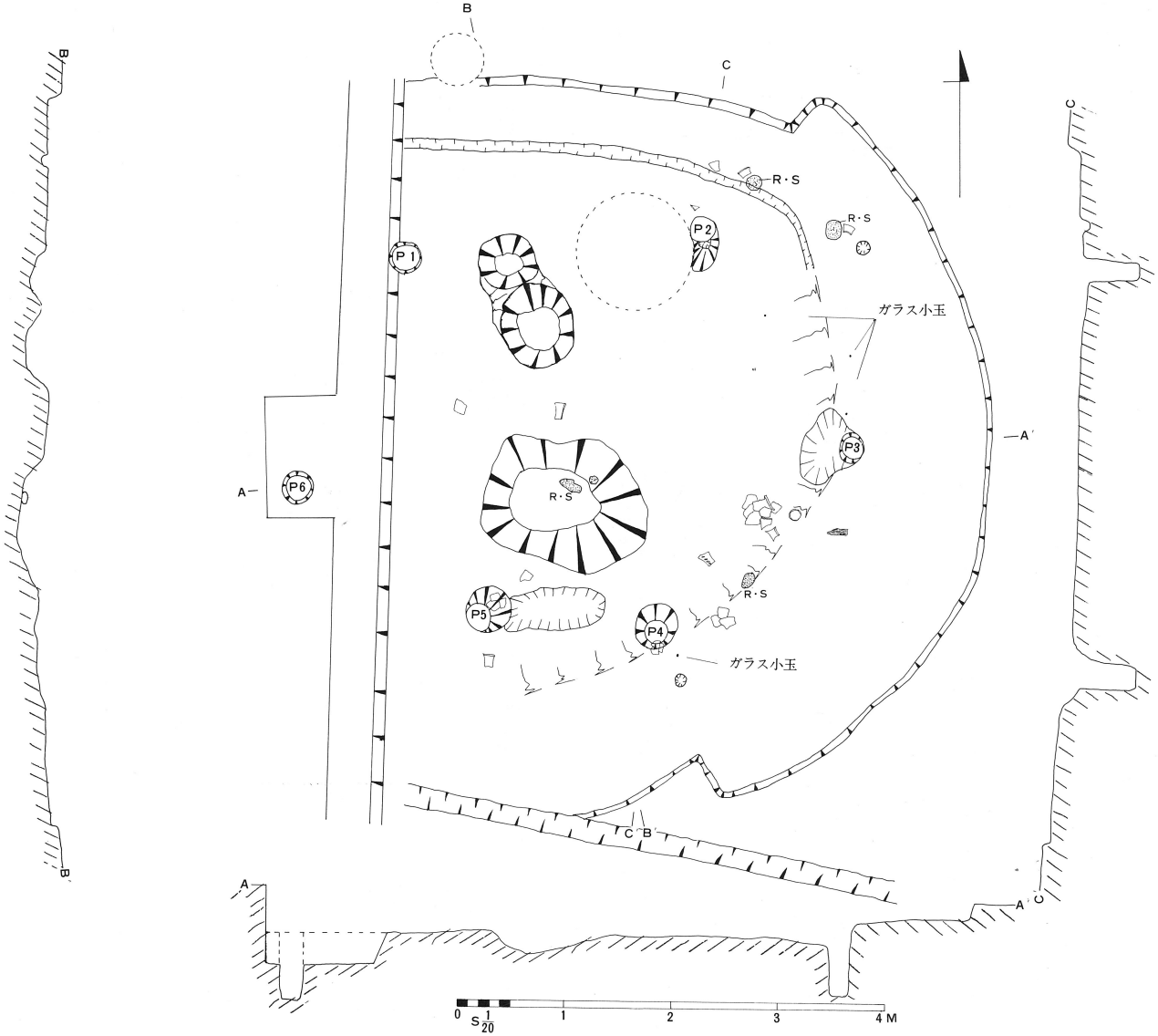


Fig 3 2号住居址平・断面側量図

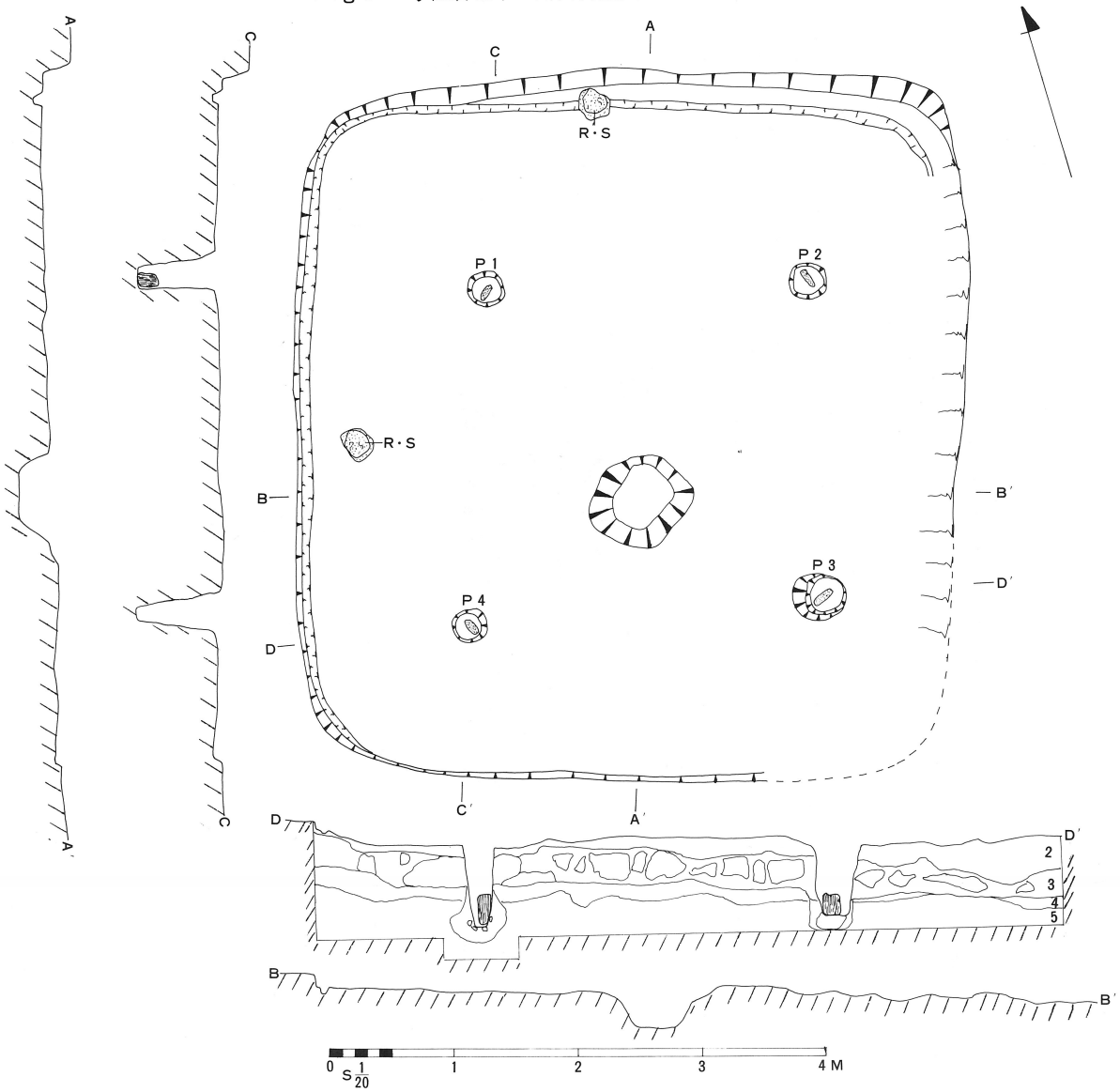


Fig 4　3号住居址平・断面測量図

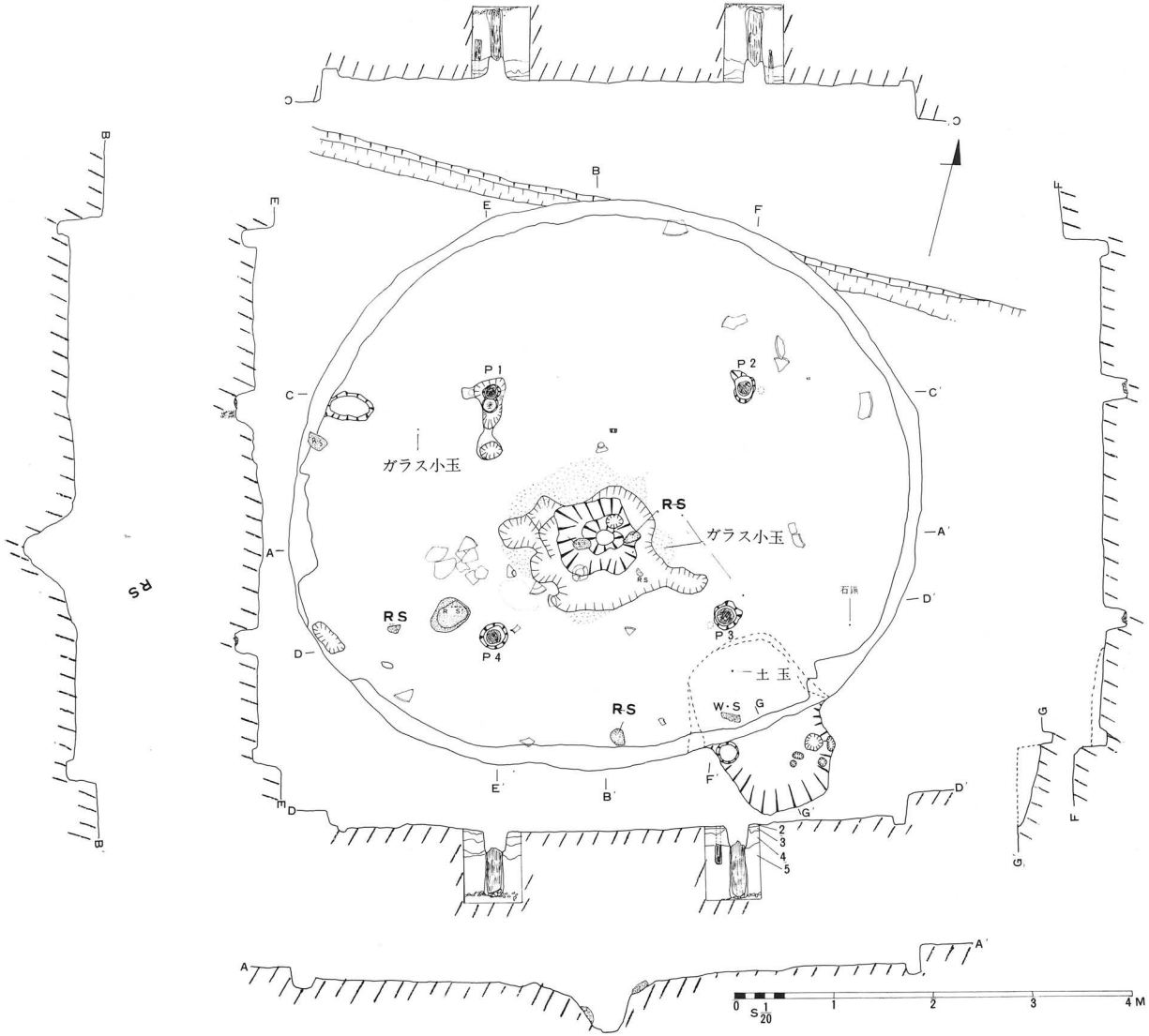


Fig 5 2号建造物址平・断面測量図

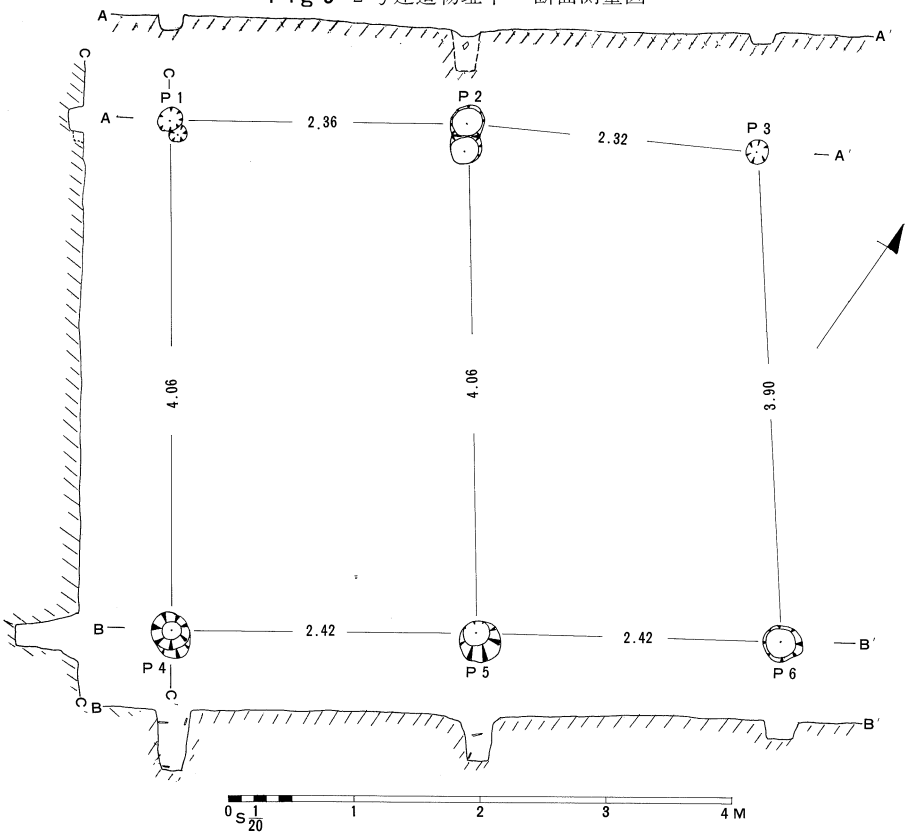


Fig 6 3号建造物址平・断面測量図

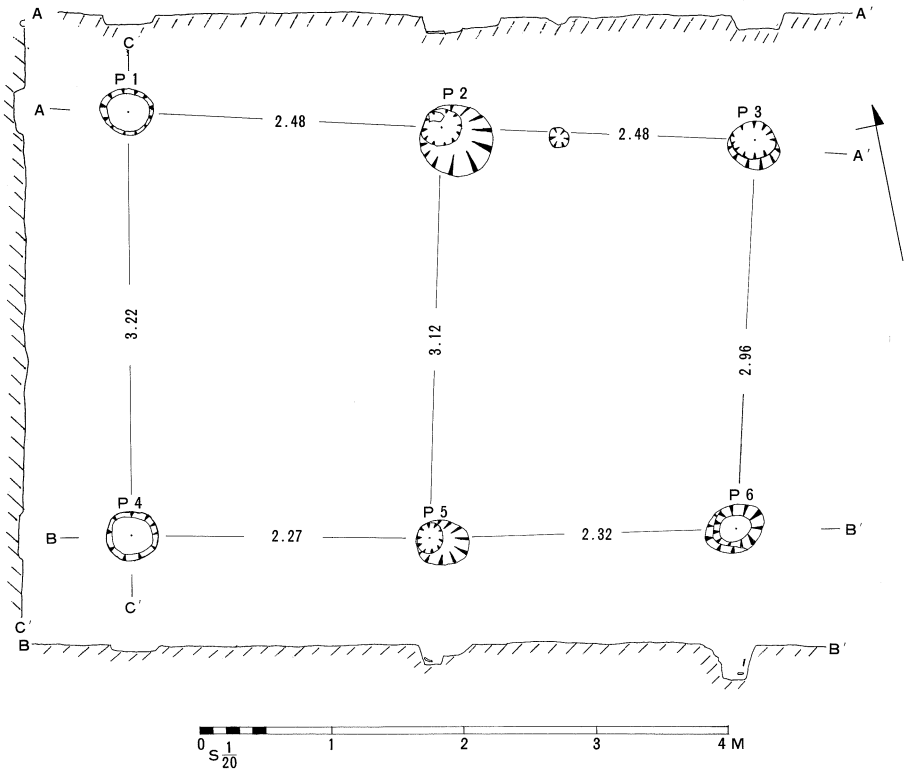


Fig 7 4号建造物址平・断面測量図

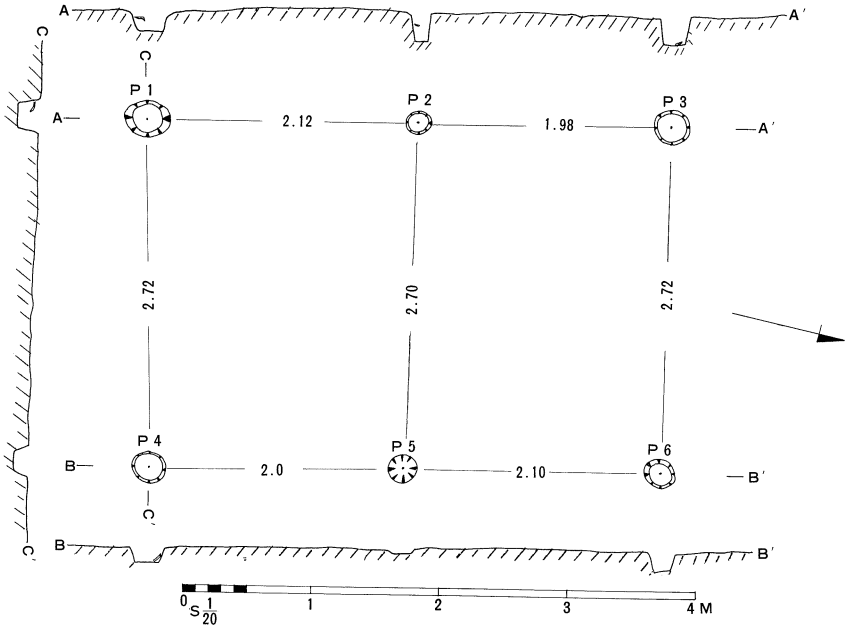


Fig 8 5号建造物址平・断面測量図

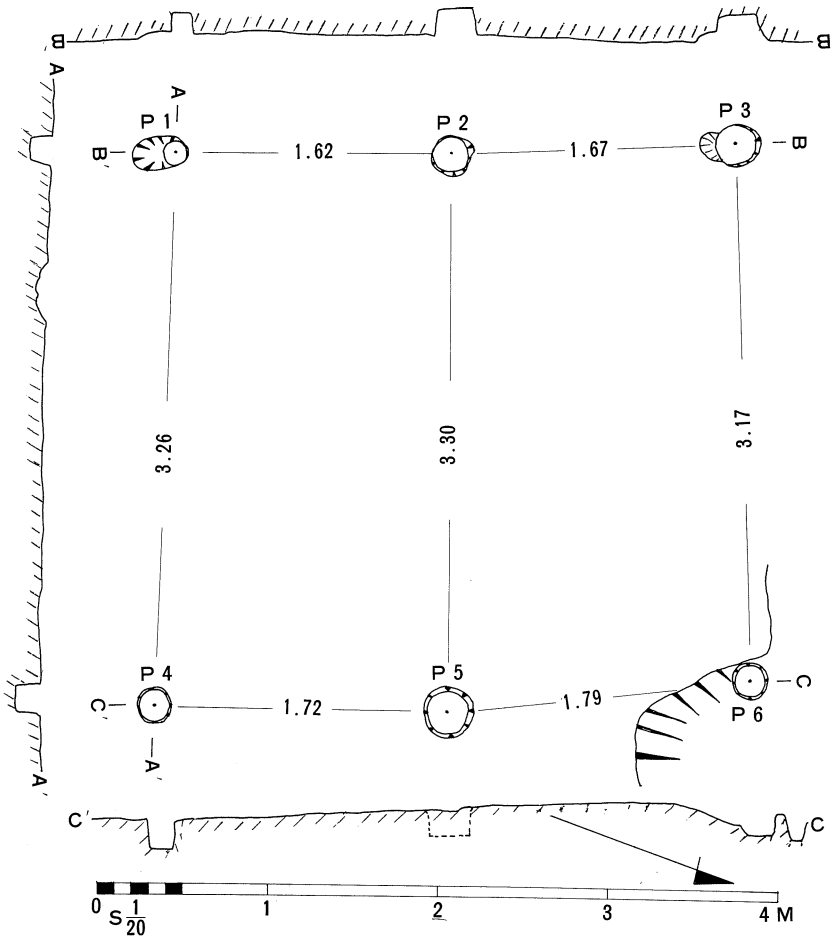


Fig 9 6号建造物址平・断面測量図

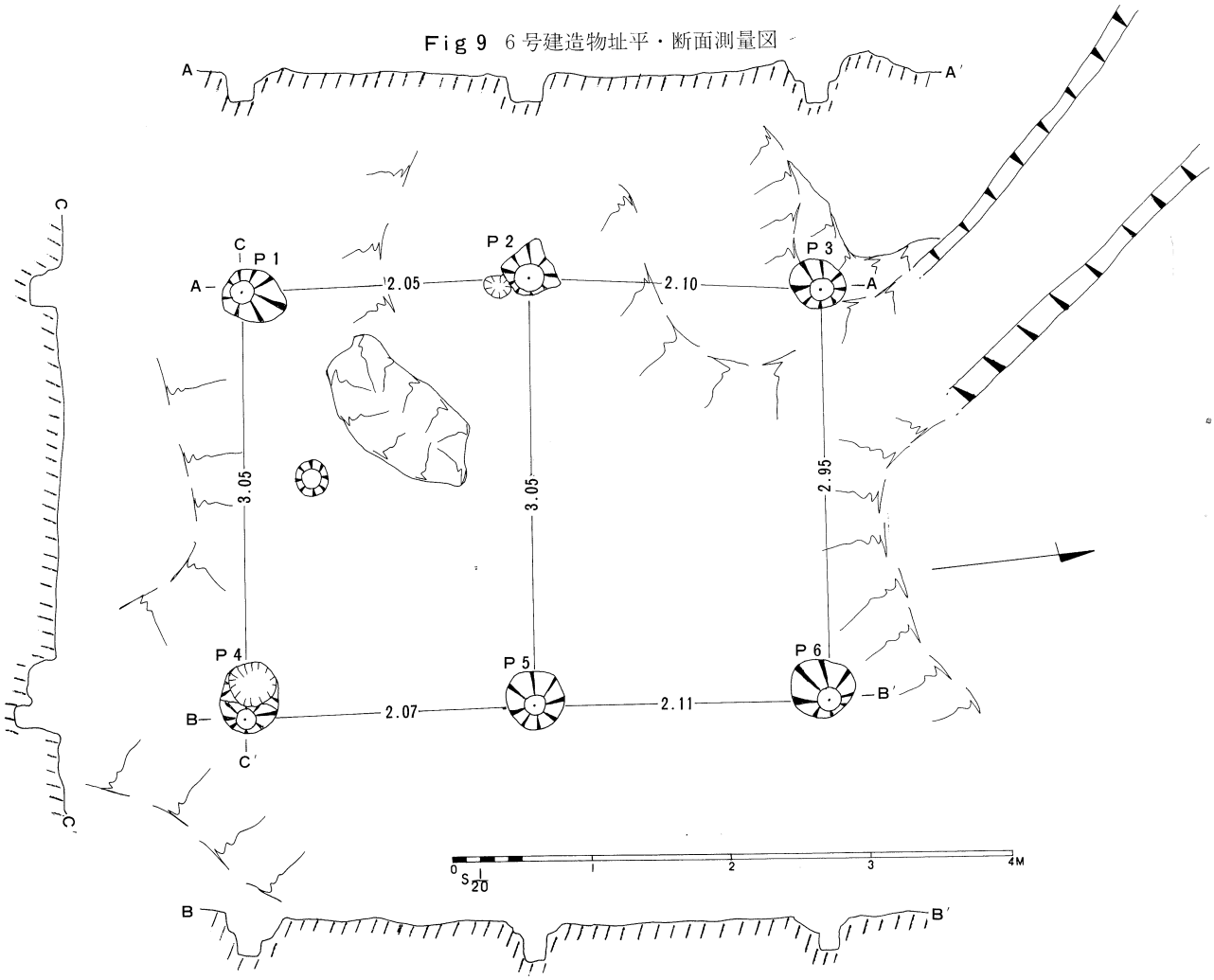


Fig10 B土坑平・断面測量図

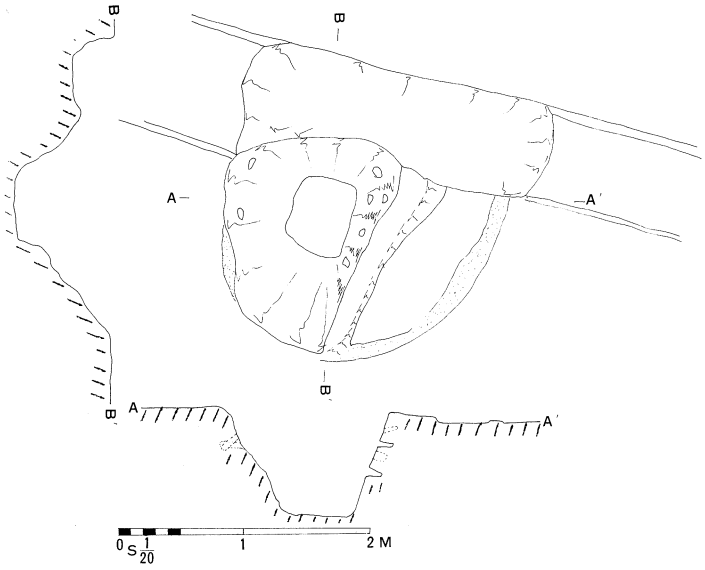


Fig11 G土坑平・断面測量図

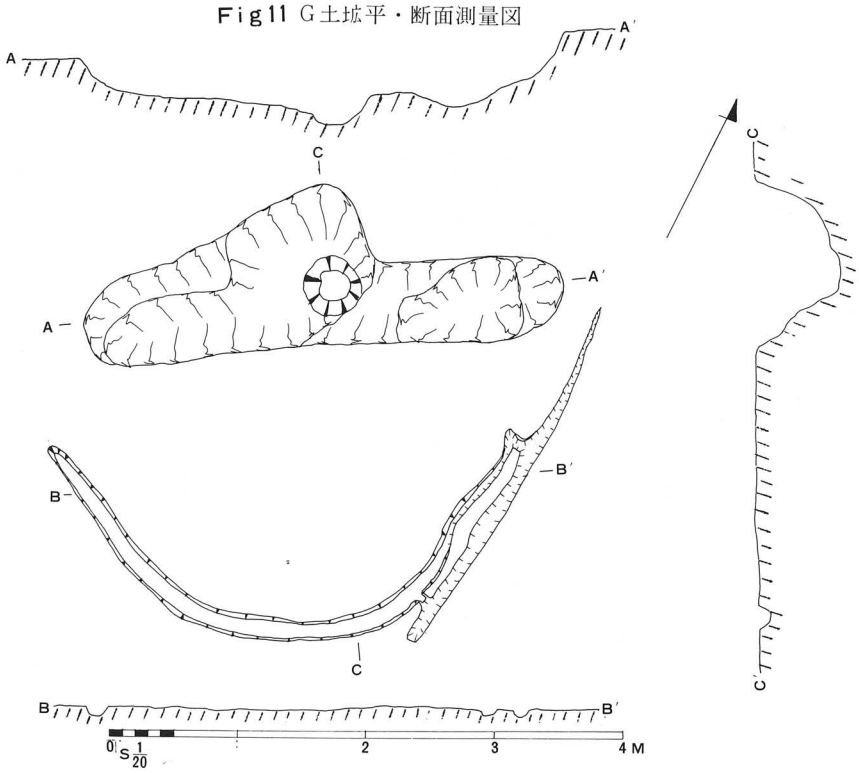


Fig12 1号住居址出土遺物実測図

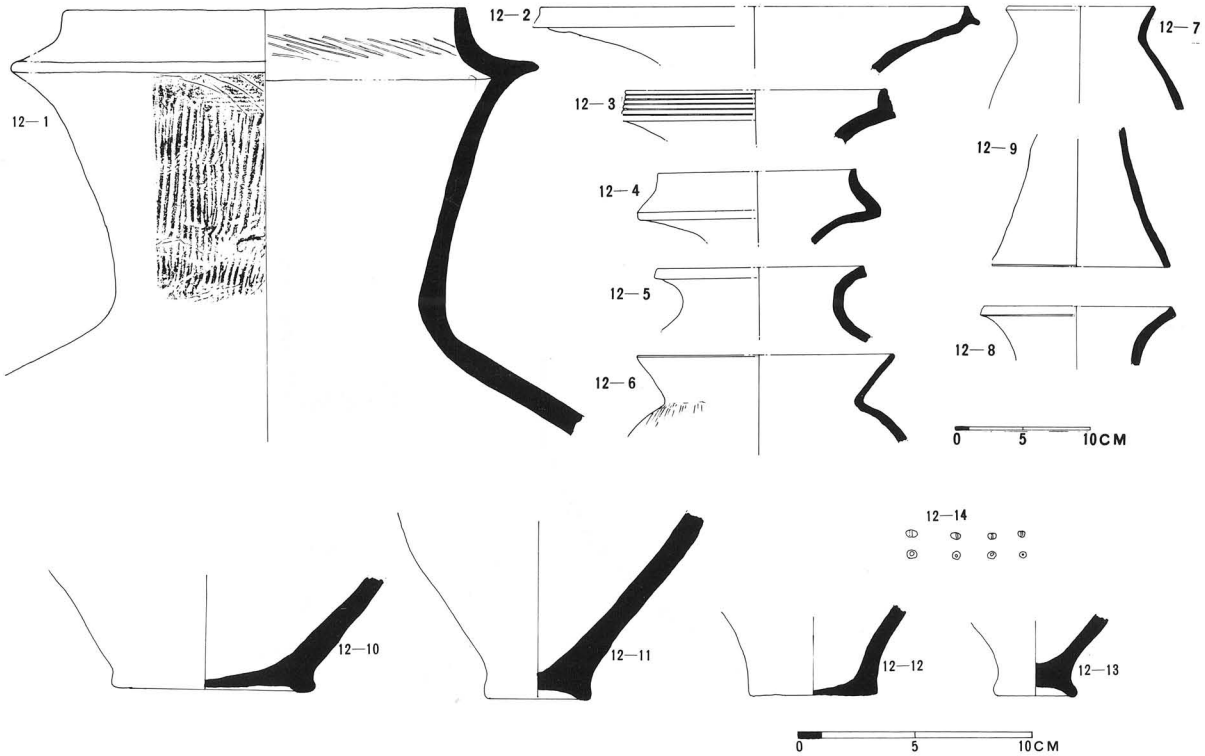


Fig13 2号住居址出土遺物実測図

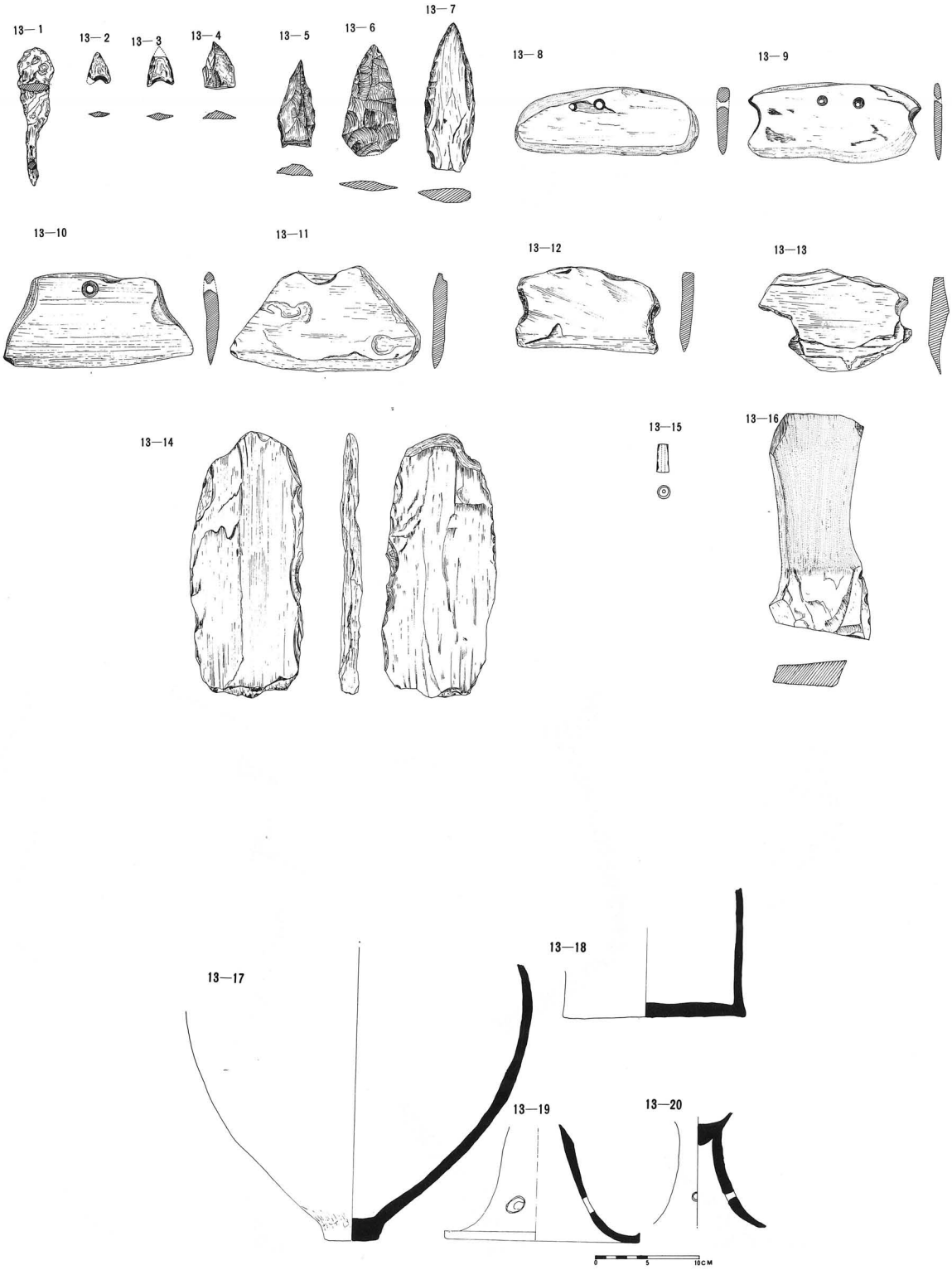


Fig14 3号住居址出土遺物実測図

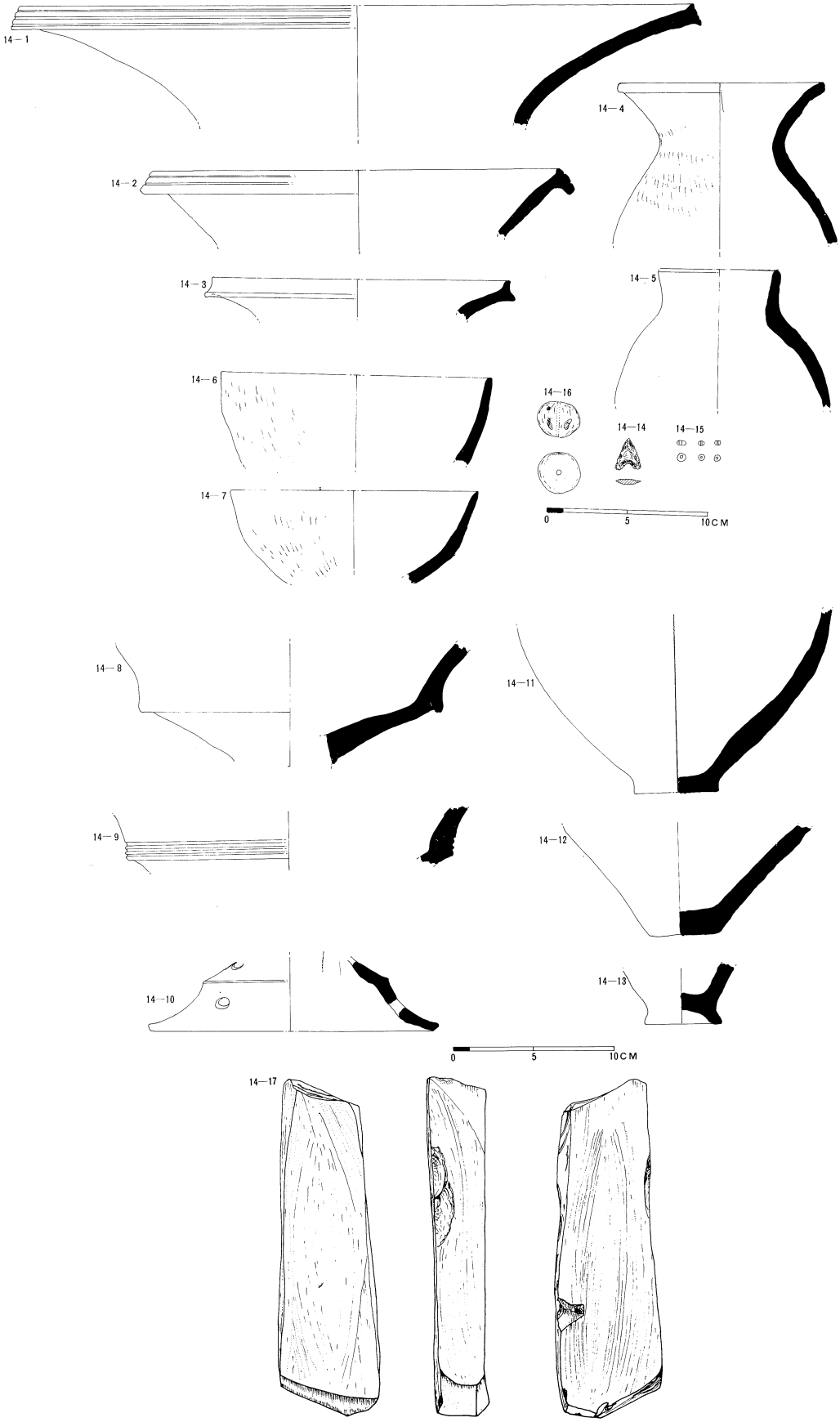
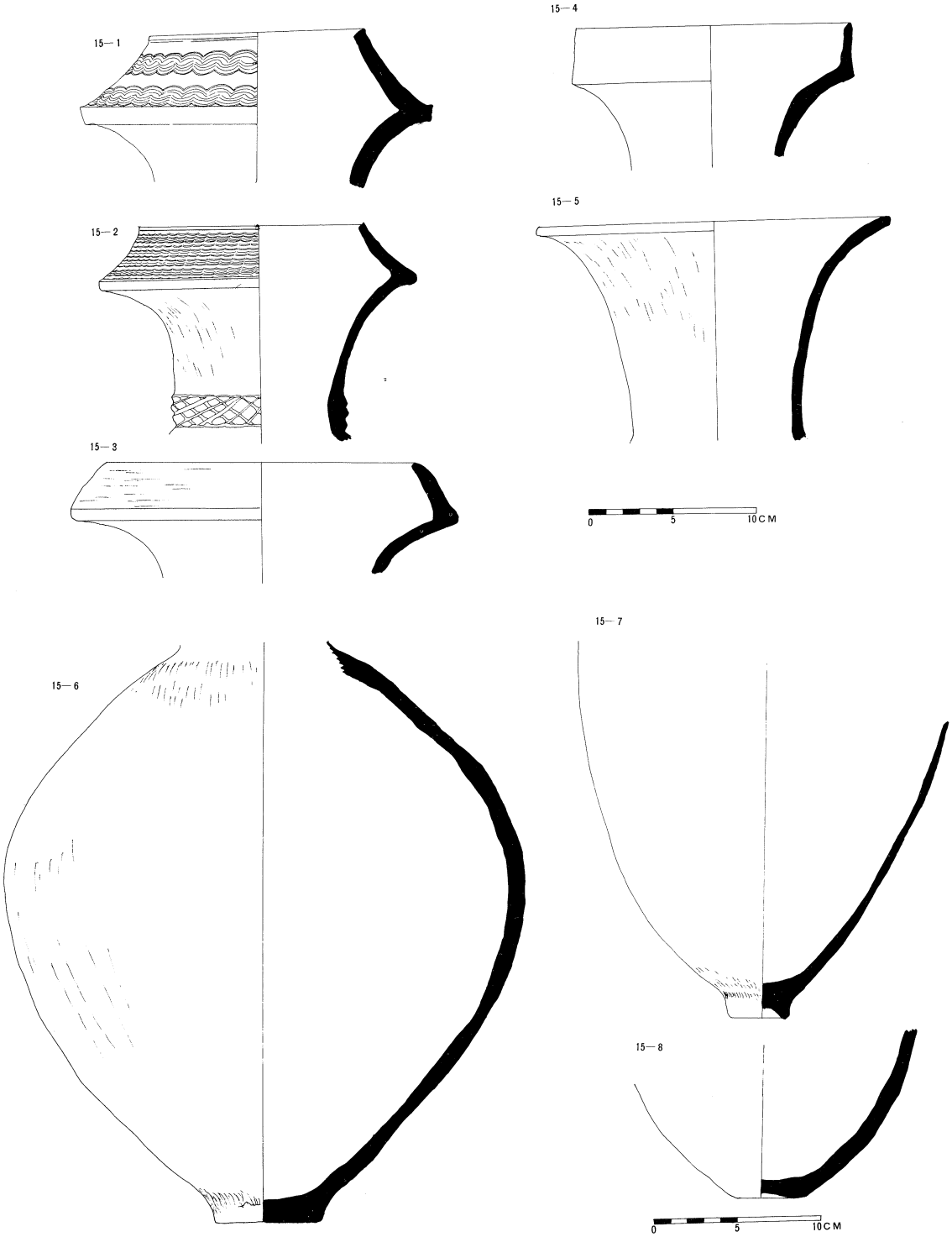
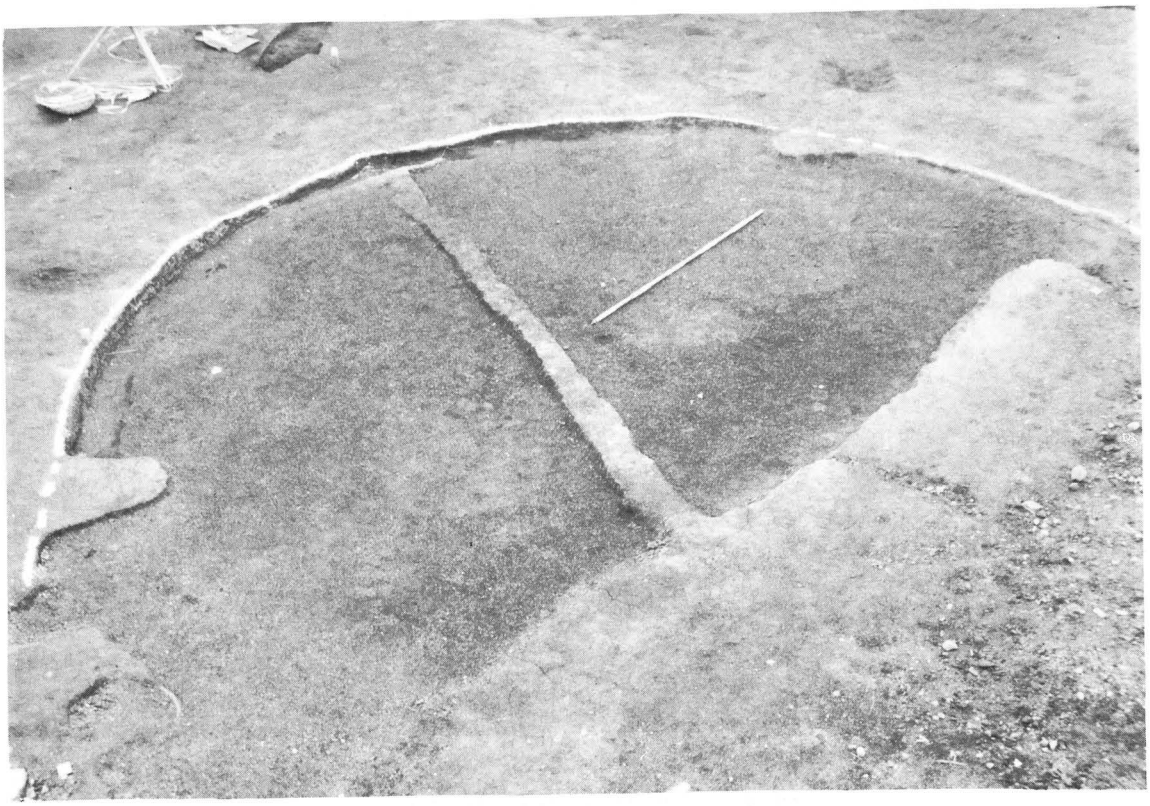


Fig15 溝状遺構出土遺物実測図



PL 1　補足調査前の１号住居址（北西より）



PL 2　１号住居址（西より）

PL 3　1号住居址遺物出土状況

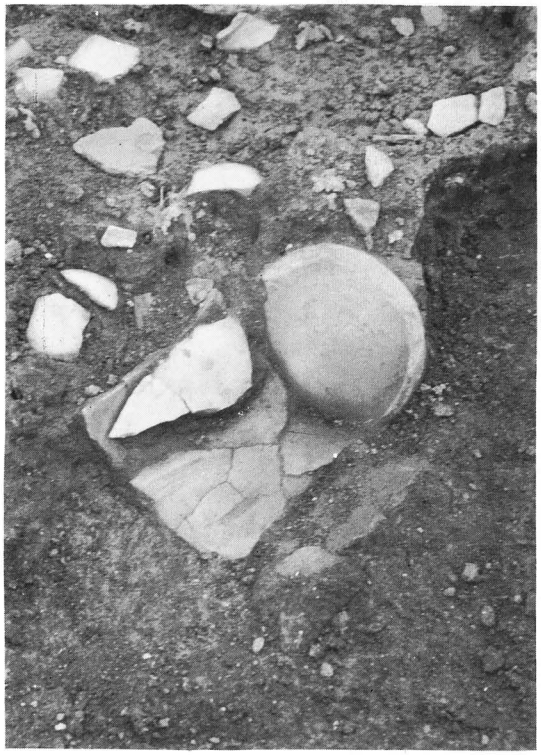
PL 4　2号住居址遺物出土状況（南より）

PL 5～8，2号住居址遺物出土状況

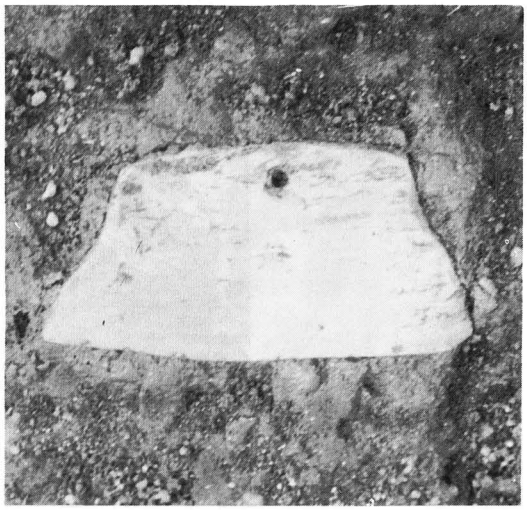
PL 5　（壺形土器）

PL 6　（鉢形土器）

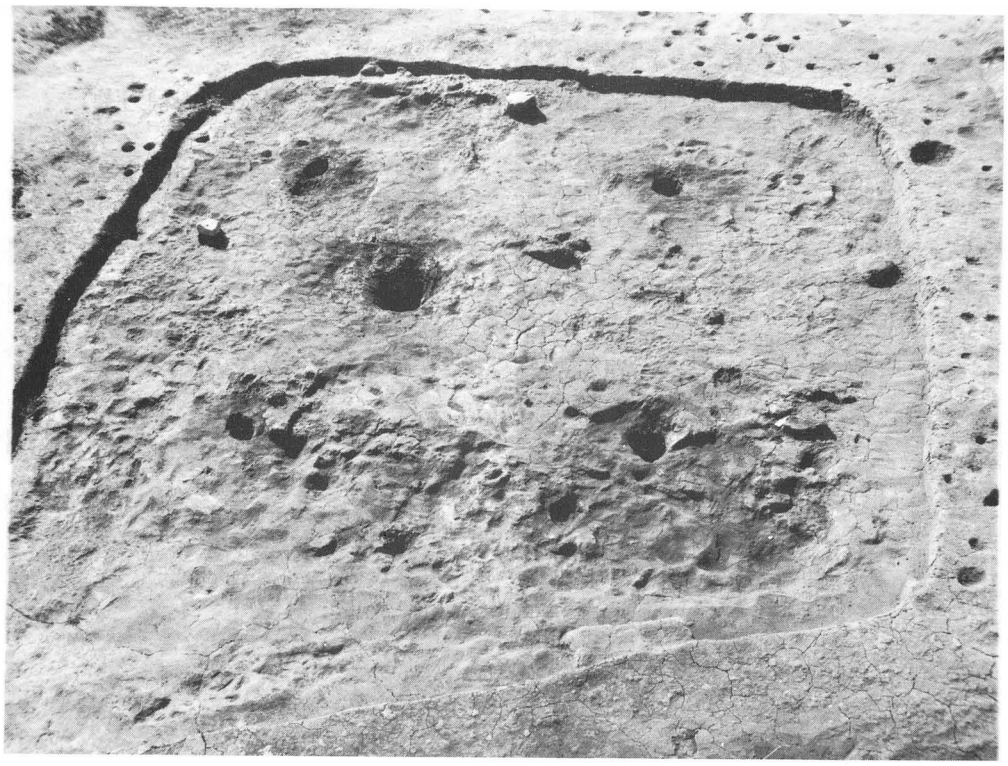
PL 7　（円筒形土器）



PL 8　（石包丁）

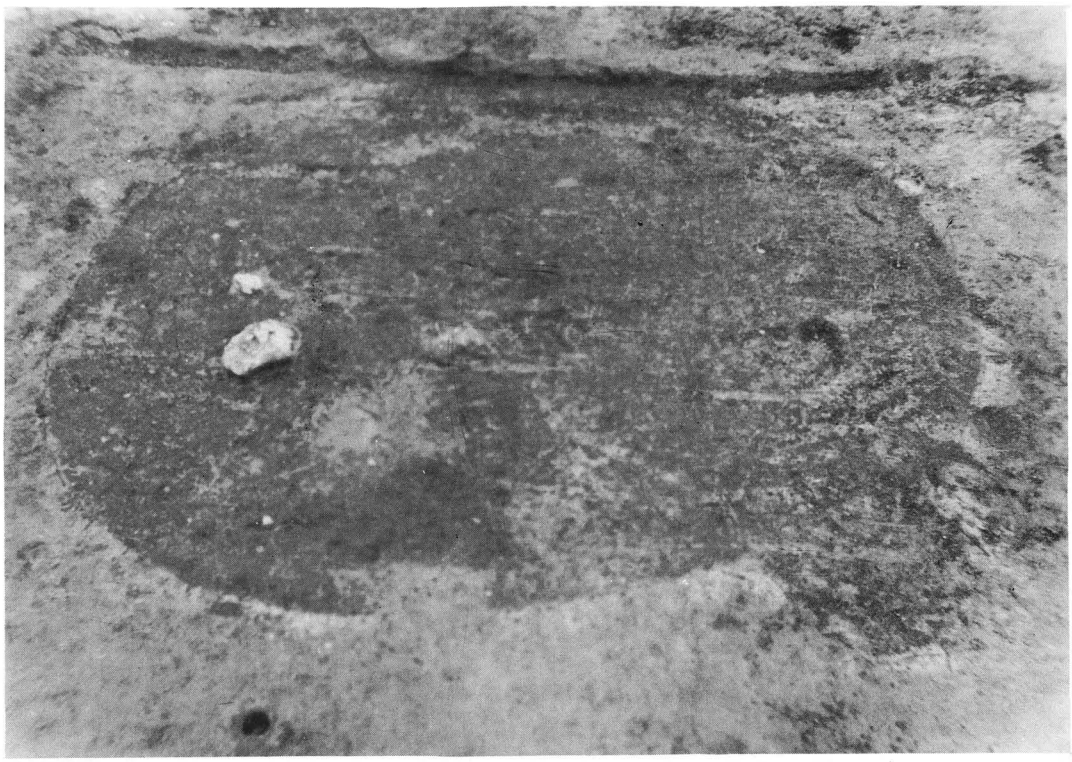


PL 9　補足調査前の２号住居址（東より）



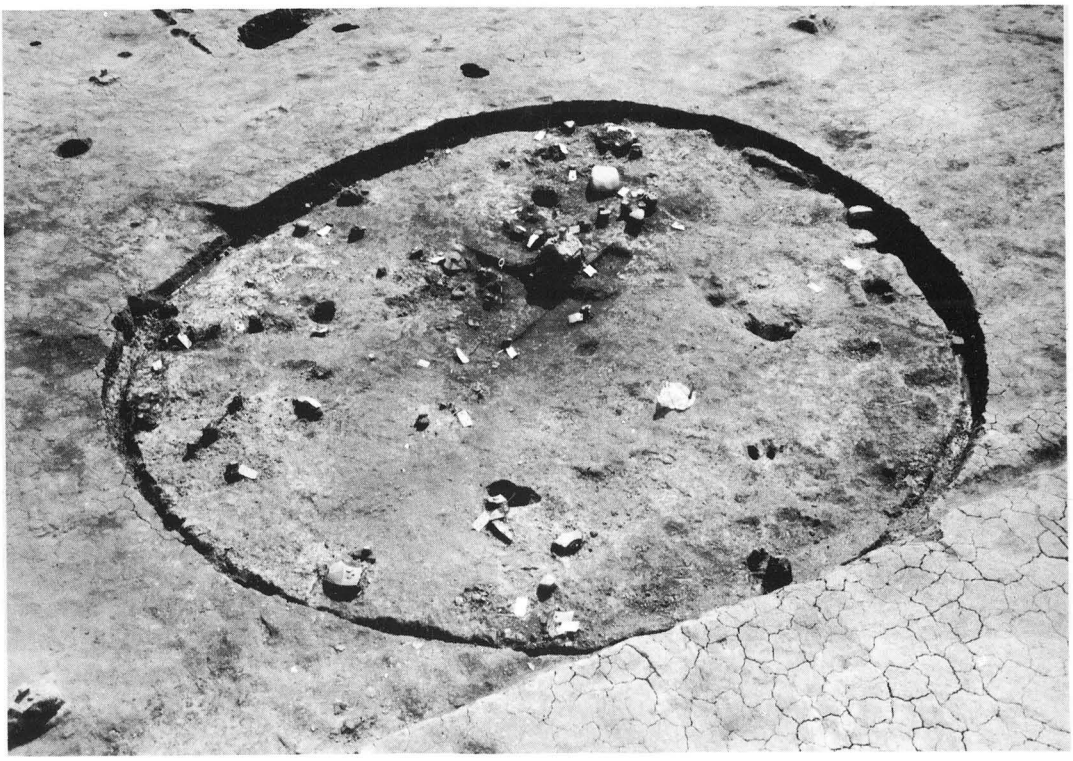
PL 10　２号住居址Ｐ―２の礎板（東より）

PL11　発見時の３号住居址（南より）



PL12　３号住居址（北東より）

入口
→



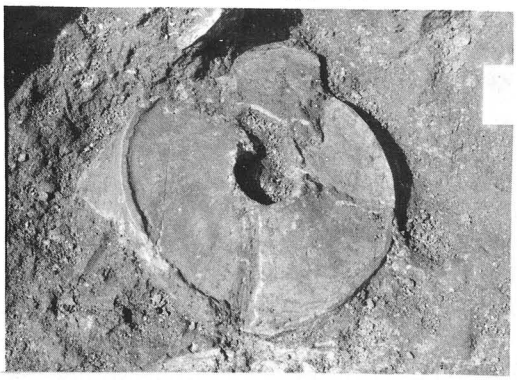
PL 13　3号住居址炉址付近（東より）

PL 14　3号住居址入口部（南より）

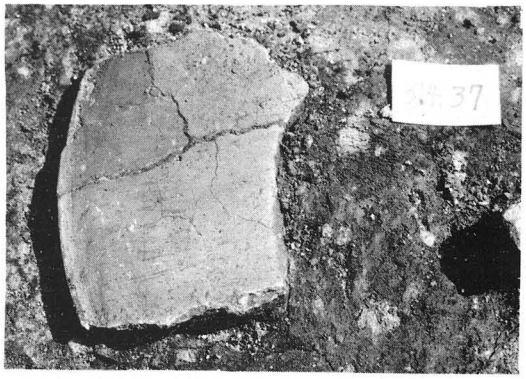
PL 15　3号住居址遺物出土状況（砥石）

3号住居址遺物出土状況

PL16　（高　坏）



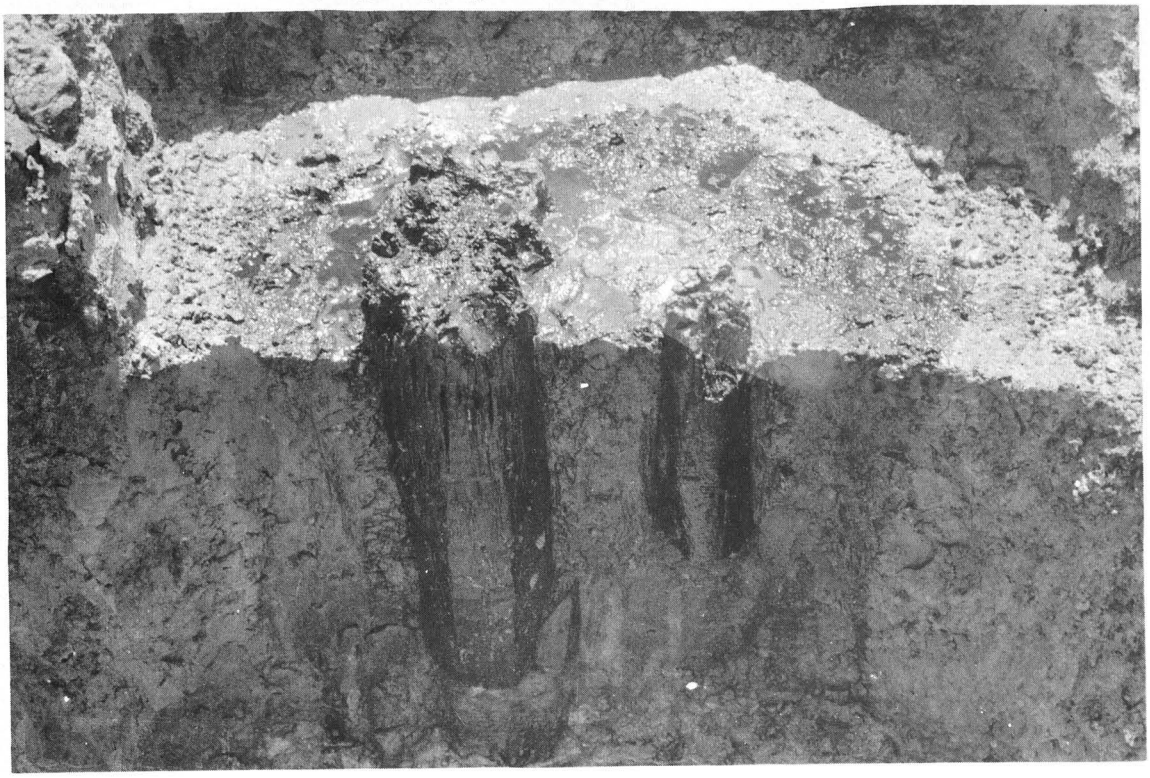
PL17　（朝顔口縁）



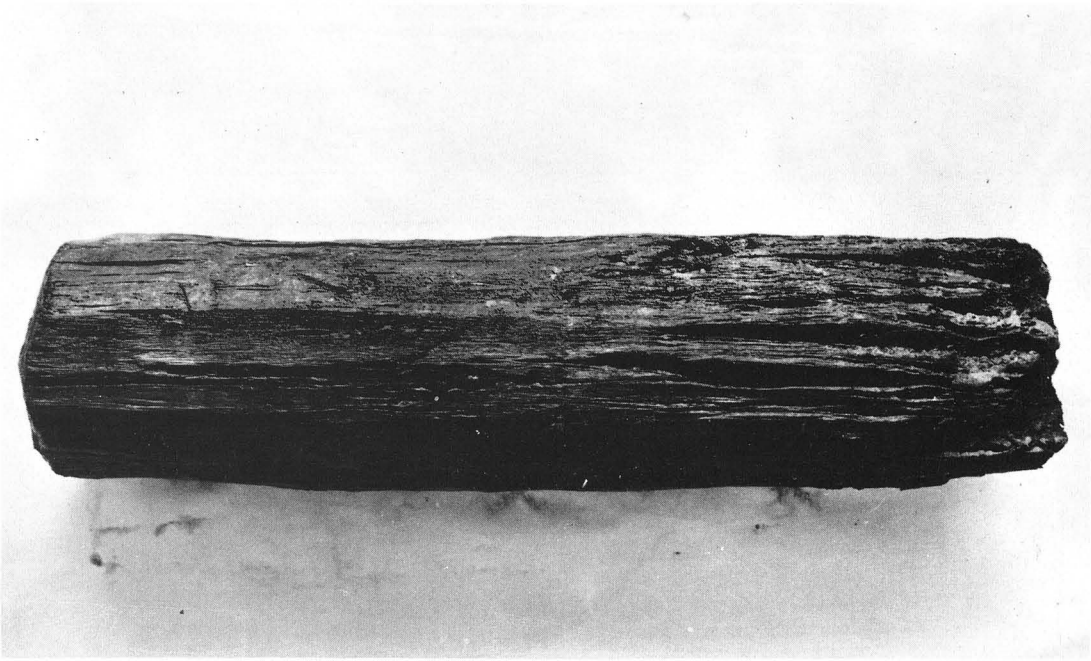
PL18　3号住居址内部

PL19　3号住居址P—4柱残存部切断面（南より）

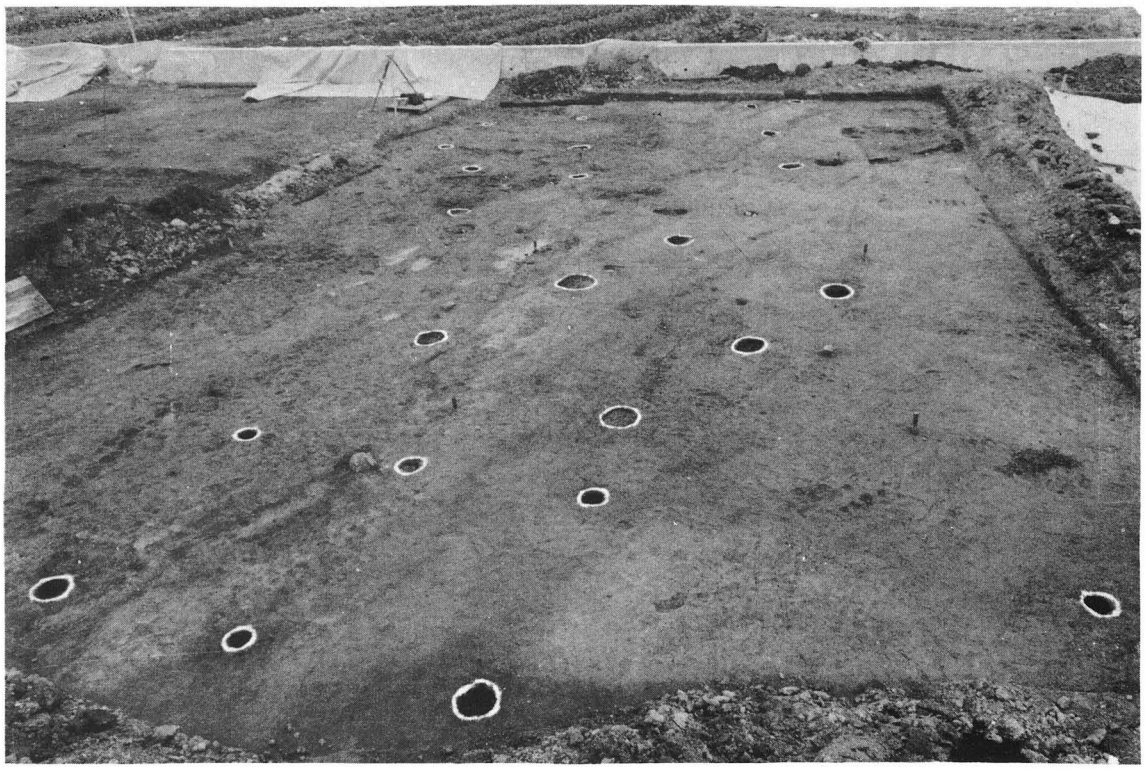
PL20　3号住居址P—1柱残存部切断面（北より）



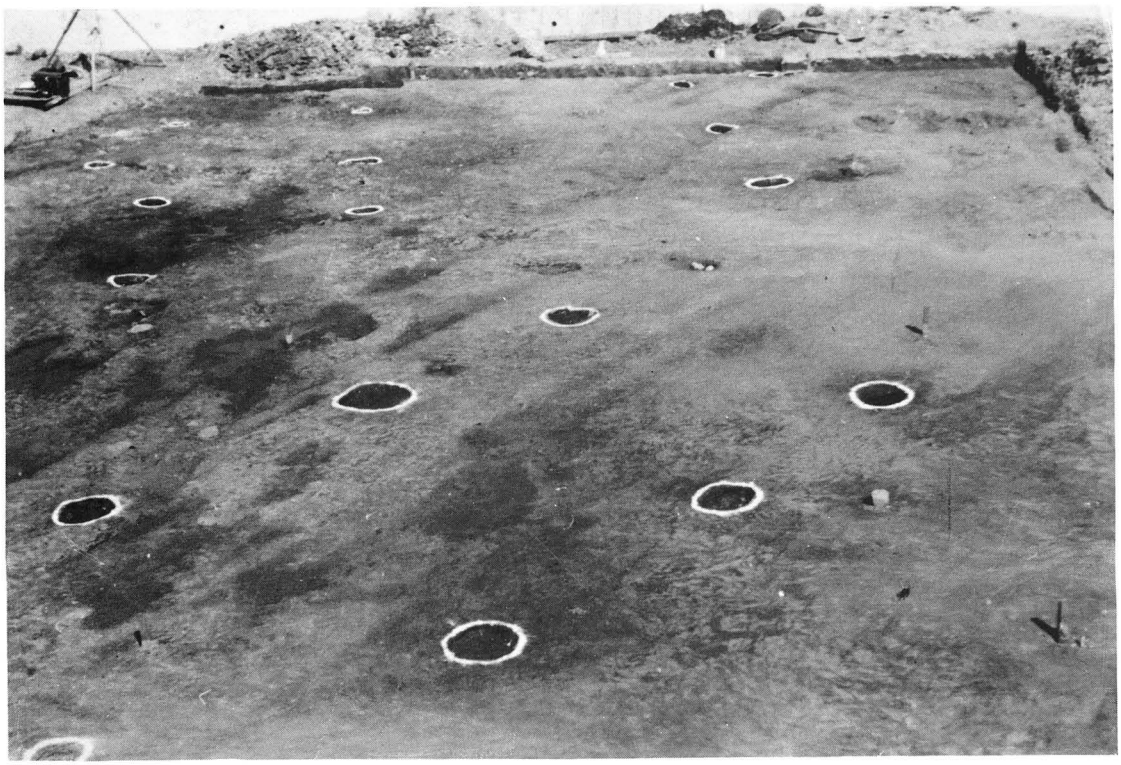
PL21　3号住居址Ｐ１主柱基部



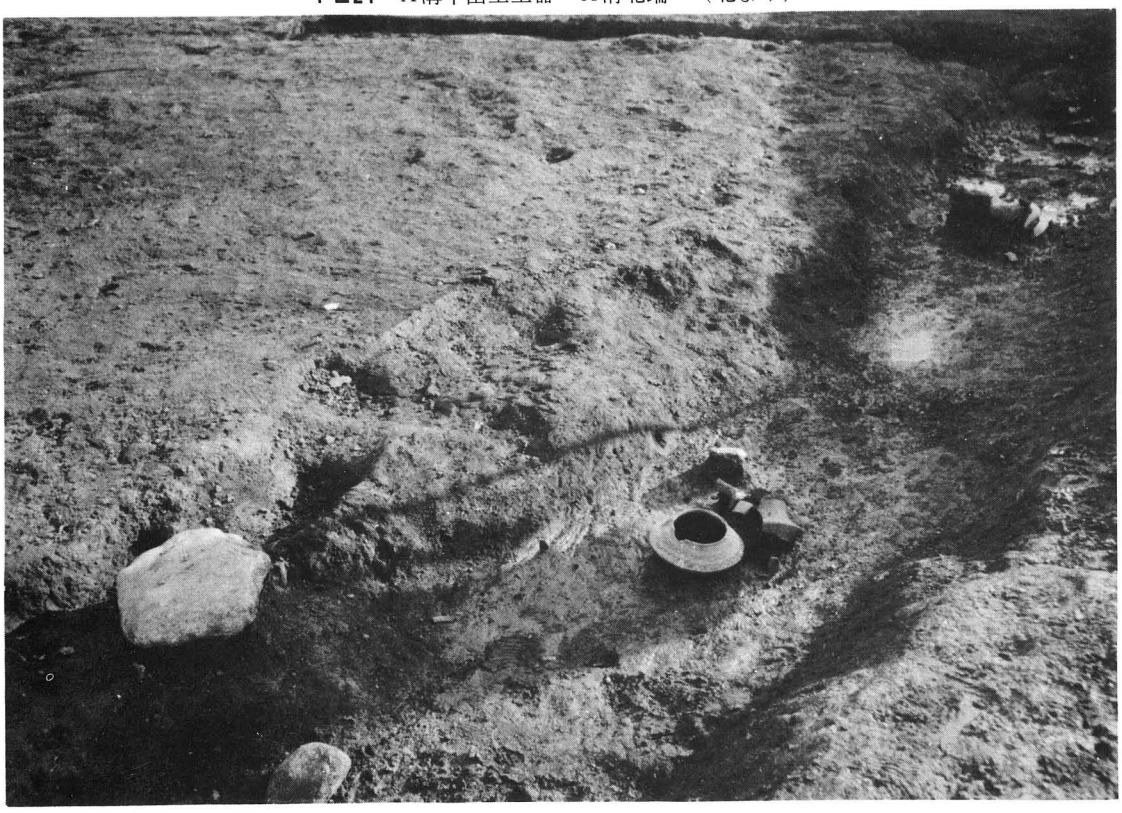
PL22　建造物址（手前より４．３．２号）―（西より）



PL 23　建造物址（手前より３—２号）—（西より）



PL 24　Ａ溝中出土土器—Ａ溝北端—（北より）



PL25　北部溝状遺構

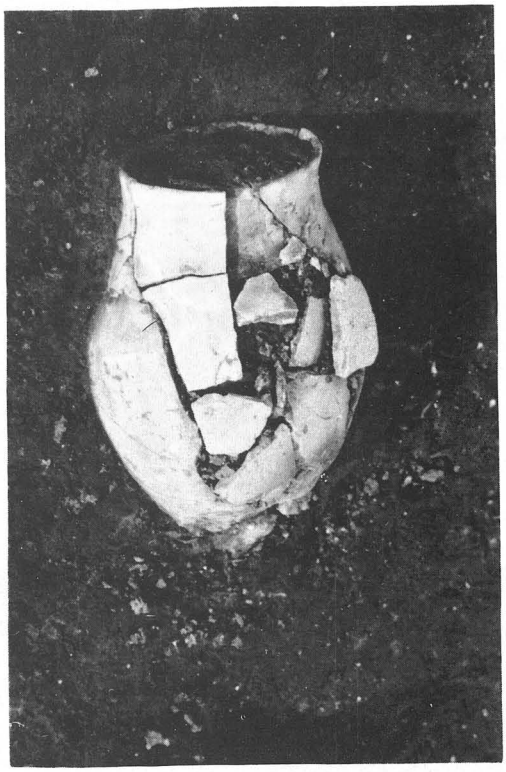
PL26～30　A溝内遺物出土状況

PL26　（壺形土器）

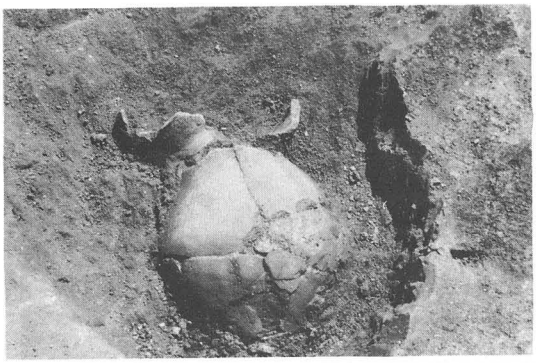
PL27　（壺形土器）

PL28　（壺形土器）

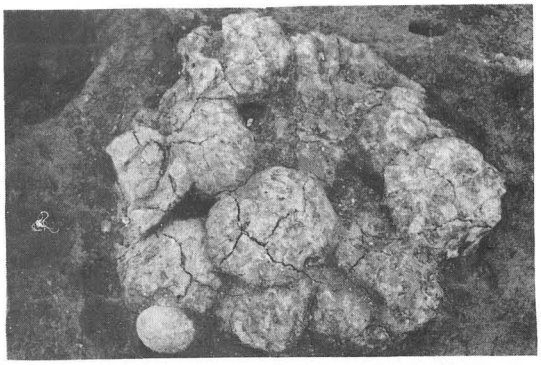
PL29　（壺形土器）



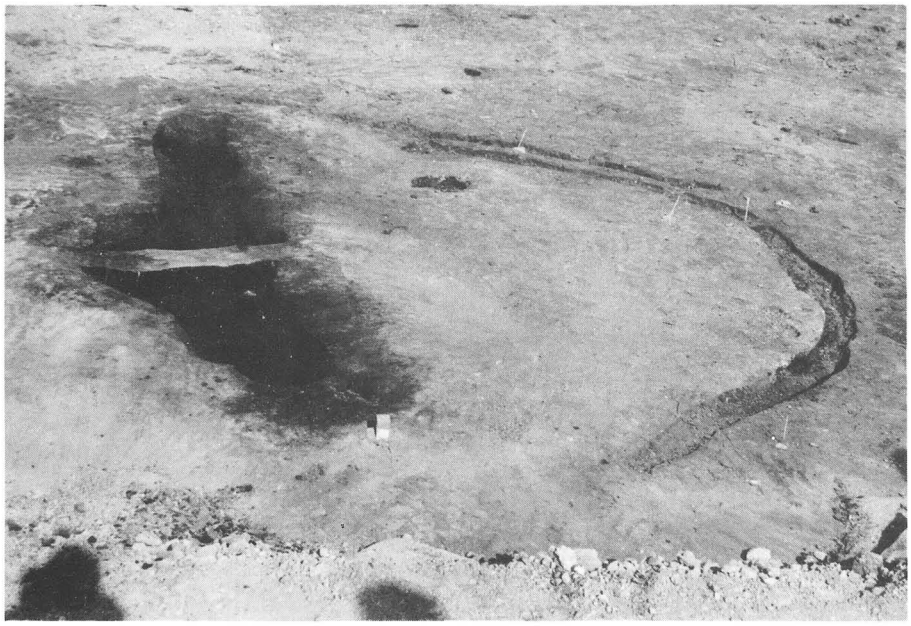
PL30　（壺形土器）



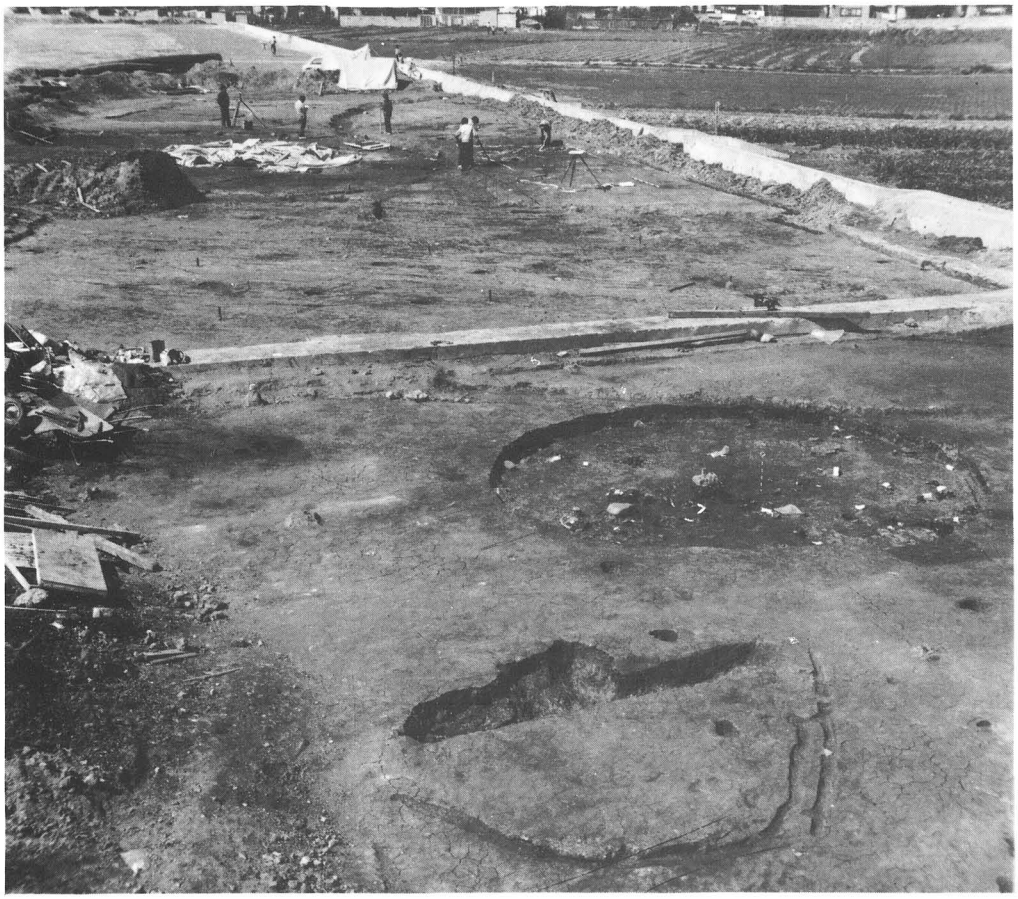
PL31　土坑Ｃ中の粘土塊



PL32　土坑 G（西より）



PL33　釜ノ口遺跡全景（南より）



松山市文化財調査報告書　第５集

昭和48年３月31日

編　集　　釜ノ口遺跡発掘調査団
発　行　　松山市教育委員会
　　松山市二番町四丁目ＴＥＬ（0899）21―1111
印　刷　　有限会社　　青葉図書